
馬鹿二人と少女達

蔵野茅秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿二人と少女達

【Nコード】

N2681X

【作者名】

蔵野茅秋

【あらすじ】

ロウきゅーぶ！小説なのにロリがメインじゃない！？
主人公は中学時代にスバルと試合をした一人の選手。ひよんなことからスバルと出会って、お互い意気投合して友人に！！
二人のバスケット馬鹿が織りなす、あんまりロリが前面に出て来ない…
ハズの物語。
ロリ期待な人にはごめんなさいかもです。もしかしたらタイトル変更あるかもです^^；

序 ロッカールーム（前書き）

基本的には原作に準拠しています。誤字・脱字などあればお知らせ
お願いします。

連絡いただけると本当に嬉しいです。とりあえず、何かあれば連絡
を！のつもりで読んでいただくと助かります。

それでは本編をお楽しみください。

序 ロッカールーム

「来たぞ！」

「またかよッ！」

「お前ら！くつつちゃべってないで、あの闘将を止める！」

闘将　もしくは桐原中の知将は、トリプルチーム（三人がかり）で止めに行った俺のチームメイトを引き付けるだけ引き付けると、あっさり味方にパスを回す。

パスを受けた選手は、闘将によって空いた穴だ。闘将のやつはそこを見切ってパスをした。お陰でそいつはどフリーのままレイアウトを悠々決め自陣に戻っていった。

残り時間は二分を切っている。点差は五点。スリー（三点シュート）を二本決めればまだ逆転できる！

コートの中にボールが戻り、試合再開になる。闘将のチームはゾーンディフェンスに徹し、堅固な城塞を構築している。

中に切り込もうとしても、闘将がチームメイトに指示を出し、的確に処置していくから、中に切れ込んでいくことなんてほぼ無理だ。「サキッ！」

攻めあぐねていた司令塔が一縷の希望をといった様子で、俺にパスを回す。

「くそっ！ライアーだ！」

闘将が吠え、一人ゾーンから離れこちらにやってくる。いわゆるボックスワンというディフェンス体形だ。

だけど……それじゃ遅い！

俺は闘将がブロックする暇さえ与えずにその場からシュートしたらどう考えてもそこからシュートから少し離れたその場所は、普通のやつなここはギリギリ限界線。おれの放ったシュートは低い弾道のままボードに当たりリングに吸い込まれた。

(これであと二点…)

俺は大きく息をしながら三口三口と自陣に戻り守備をする。チラツと横目に確認した残り時間は、後一分半。まだ逆転できる！

相手はさっきと同じように闘將の奴がボールを運んでくる……が、のんびりとした様子でこちらに向かってくる。

(クソツ！時間かせぎかよ！)

二十四秒ルール 一定時間内にシュートをしなければいけないという決まりだ。つまり時間いっぱい使って、自ら攻撃をしてこないのだが…、もし焦れてこちらから動いてしまえば、闘將のことだすぐに攻撃に来るハズ！

いやな我慢比べが始まる。逆転できるかもしれない！目の前にあるボールを奪えば、今すぐにも逆転できるかもしれない。だけど三十秒耐えることができれば、何のリスクもなくボールはこちらに回ってくる。

イライラとしながら残りカウントが始まる。あと十、九、八。その瞬間を狙ってなのか闘將が動いた！自ら突っ込んできてゴール下までボールが！

一人で闘將を抑えていた仲間が、あっさりと抜かれおれの前に来た！俺は一瞬で闘將の懐に潜り込む。こんな行動をするとは思っていなかったのか闘將のやつ一瞬硬直。それを逃す馬鹿なんてこのコートにはいるはずがない！闘將の手元に帰ろうとしたボールを弾くと、闘將を横目にボールへ。転がっていたボール確保してゴールへ！闘將の気配を後ろに感じる！きつと振り返るとその場にいるだろうけどそんなの確認なんてしてる必要はない。俺はこの勢いそのままゴールに向かって飛びボールを置いていく。ボールはゴールに吸い込まれ、ついに俺たちは桐原中と並んだ。

俺はすぐさま敵陣から引き返し、闘將を迎え討つ準備を整えた。闘將は桐原中のメンバーを鼓舞し、ボールを中に戻し、さっきと同じペースで攻めてくる。

「またかよっ！」

心のうちで愚痴ったつもりだったが、どうやら口に出ていたみたいだ。周りで一緒に守備をしていた仲間から「全くだ!」とか「余裕かよ!」なんていう声が聞こえた。

そんな中、闘将のやつはようやくハーフコートを超え　　ッ!突然切れ込んだ!あまりにも大胆な行動で、油断をしましてしまって味方は簡単に抜き去った!

闘将の野郎、さっき俺がやったことをやり返したつもりか、わざわざ一瞬こつちを見て笑いやがった!

クソッ!残り時間は:三十三秒かよ!早くしないと追いつけない!ボールを中に　　なっ!オールコートプレス:。桐原中のメンバーがコートに散り散りになって俺のチームメイトにプレスをかけている!

ボールを中に入れようとしているチームメイトがもたつく。

「こつちだ!」

俺は無理矢理マークを振り切ると、なんとかコートに入ったボールをもぎ取り、ゴールに向かう　　が、それを許してくれない!俺の目の前には桐原中のメンバーがダブルチームで俺に当たってくる。「ク、ッソ」

何とか奪われないようにするがその努力も空しく、ボールは弾かれコート外に転がって行った。

良かった。相手ボールじゃなくうちのチームのボールだ。不幸中の幸いとはこれだな。しかし今攻めきれなかったせいで、残り時間が二十秒を切っていた。

本当ならここでタイムアウトを取って、一度策を練るべきなんだろうけど、うちのチームが取れるタイムアウトは使い切ってしまった。ほんとどうしようもない。

それでもまだ負けた訳じゃない!

仲間が投げ込んだボール。それをほかのチームメイトが運びゴール前に!だけど闘将がそれを阻み、中に入ることもシュートを打つことさえ許してくれない!なんとかボール戻したところで十秒を切

った。その次のタイミングでボールは俺のところによつてきた！残り
りは五秒。目の前には「ライアー」と言つて飛び出してきた闘将。

全くこの状況どうしろってんだよ！

もう時間もやれることも限られてる。一度も成功はしたことはな
いけどやれる自信はある！

今俺ができる最高を……ご覧じろッ！

俺のボールを、俺を止めようとしてきた闘将に、俺は手を交差して
闘将の眼前に！その瞬間俺の手元からはボールが消えた。

闘将が一瞬呆けた顔になる。ザマアミロだ。そして終了を告げるブ
ザーが鳴り、ボールがリングに当たり床に落ちる音がコートに響い
た。

この瞬間…俺の公式戦のバスケ人生も終わりに告げるブザーにもな
った。

序 ロックカーラム（後書き）

はじめまして。そして最後まで読んでいただきありがとうございます。です。

小説家になろうシリーズに初めて投稿しました、蔵野茅秋くろのちゅうといいます。少しでも面白いモノが出来るように頑張りますので、生温かい目で見守って下さい。

とりあえず原作を基本にやっつけていこうと思っってますが……追いついたらどうしようか？

まあ、それはそこまでいってから考えます。ともかく、これからよろしくお願いします。

第一試合 第一ピリオド

「未咲！次はこっちやっときな！」

「あゝい了解つす」

そう言つて俺は手元にある野菜を処理していく。まああれだ、あれですよ。下ごしらえというやつですよ。俺が今何をやっているかといえは、居酒屋のバイトで調理をしている訳……未成年が。ちなみに現時刻は午後十時を回っていますが、なにか？

牧村未咲。十六歳。誕生日は四月十日。バイト先はちよつとしたツテで潜りこめた居酒屋。特にいかかわしくないが、微妙に怪しい雰囲気がある。

ちなみに一人暮らし。親は喧嘩別れで離婚して、親権を持った親は去年の冬に倒れてそのまま帰らぬ人になってしまった。収入の無い俺は、中学卒業と同時に社会の荒波に揉まれる事になった訳で……。まあ、生きるために働く。それは当然のことで、少し投げやりな気持ちになつていしまふ4月の中旬だった。

始めたばかりの仕事には未だに慣れずストレスばかりが溜まつていく。そんな折、ようやく回ってきた休日に、俺はこのうつぶんを晴らそうと、短いバイト期間に稼いだ資金を元手に、久しぶりに昼間の街中へと繰り出すことにした。

目的地の街に到着して、色々と冷やかしながら店を回つてみる。しかし一人で行動していても面白くなく、少し寂しさを感じ始めたそんな時だ。思わぬ出会いが俺を待ち受けていた。

「あれ？」

「え？」

それは何気なく立ち寄ったスポーツショップ。そこで俺は、
「闘将？」

思わず口から漏れた言葉に相手が反応した。

「突然なんだよそれ！？アレ？もしかしてお前：ライアーか？」

見覚えのない制服を身に付けていたが、そこにいるのは間違いなく
闘将こと、桐原中の知将・長谷川昴その人と出会った訳だ。

が、

お互いが中学の時の二つ名で呼び合うなんて状況になってしまい、
どこの厨二病患者だ！と、思わず叫んだ！

「ライアー止めい。俺は牧村未咲だ」

「じゃあ俺も長谷川昴だから、闘将というのは止めてくれよ」

とりあえずだ、お互いの認識をすり合わせないと。

「そうか？じゃあ何て呼べばいいよ？」

「スバルで。ライアーはなんて？」

「だからライアーやめろって。じゃあ下の名前。下の名前で、未咲
かサキって」

「そうか？じゃあサキって呼ぶよ」

「ああ。それで頼むよ」

お互いの呼び名が決まったところで、突然スバルの奴が、

「あっ、そうだ。サキ、ケータイはあるのか？」

「そりゃ、持ってるけど」

「じゃあアドレス交換してくれよ」

「あ、ああ」

アドレスを交換する事になっていた。…まあいいけど。

「それよかお前、この後時間あるか？」

「ああ有るけど…」

少し浮かない顔をしているスバルが気になってしまった俺。メー
ルとかでもよかったんだけど、どうせなら話してみたかったし。き
つとこいつの事だ、県内の強豪校に入学してるんだろうと思うし。

俺はスバルの奴が、高校レベルと中学レベルでの壁を見て少し凹

んでいるんだらうと勝手な思い込みをして、余計なお世話かもしれないがちよつと発破をかけてやるつもりだった……が、まさかあんな答えが返つてこようとは、この時の俺は予想もしていなかった。

「はあっ!？」

俺が思わずあげてしまった声は、思いのほか大きかったらしく、某有名コーヒーチェーン店にいた客と店員から、注目という名の白い眼を向けられてしまった。

「スミマセン」

無理やり俺の頭を押さえてスバル謝ると、店内は何もなかったかのように元の雰囲気へと戻った。

「ちよ、なにすんだ!」

醜態を晒してしまった事と、そのフォローをしてもらった事に照れが出てしまった。

「サキの尻拭いに決まってるんだろ」

「つか、そうさせたのはスバルの話だろ!」

多少語気を強めてしまいがそこは仕方ない。細かいことはよく分らんが、コイツ強豪校からの誘いを蹴って、七芝という高校に入学したらしい。コイツは親の希望だなんて言っているけど、きつと思ふ事があつたんだと考えてみれば、その後を聞いて納得した。コイツの入学した七芝には水崎っていう選手がいるらしい。俺はソイツがどんな奴か思い出せず、スバルに聞いてみると、どんな奴だったかすぐに分かった。確かにあいつのいる部っていうの興味がある。それで強豪校と渡り合うことを想像してみれば、楽しくなりそうだと俺も思えた。

思えたが!どうも水崎の奴は違う意味で、面白くしてくれたいらしい……。ただ当事者としては、面白くともなんもないが。

とりあえず水崎が何をしたか簡単にいえば、『女』に手を出したらしい。まあ高校生なんだし、それ位問題ないだろ。多少行き過

ぎた不純異性交遊とかなんか引つかかっても、そんな盛りが真っ只中にいる男子高校生としては、男として正常な反応だと思っただが、どうやら相手の『女』に運がなかったらしい。その相手。

『十一歳の小学生』で、しかも顧問の娘さん！

そりゃ確かに問題だわ、と思う前に先ほど叫んでしまった訳だ。つていうかこんな聞いたら普通誰でも叫ぶだろうよ……。

それでだ、その煽りを受けて七芝高校バスケットボール部は一年間の謹慎。並びに部長だった水崎は退学とあいなつたらしい。しかもスポーツ推薦で入学したらしいバスケット部期待の新人のスバルにとつてすれば、周りからの視線が針の筵に座らせているような感覚らしく、精神的に相当堪えているらしい。そりゃ、確かにそんな顔にもなるわな。

まあ、ちよつと愚痴みたいなのも吐き出してたし、少しは楽になつてくれたらと願うばかりだ。

「そっいえばサキはどこに行ったんだ？」

「なにがだよ？」

「高校。サキはこの学校に入ったんだ？」

まあ、話の流れ的にそうなるわな。

「ない」

「…はい？」

どうやら俺の言った事がちゃんと伝わらなかったようだ。てか、これで分かつたら逆に凄いわ。

「俺は高校に進学してないんだ。絶賛フリーター中よ」

「ええっ!!」

今度はスバルの奴が奇声を発し、その上座っていた椅子から立ち上がった。お陰で、再び店内にいるお客と店員からは白い目をされる。

「す、すみません！」

俺は無理矢理スバルの頭を押さえつけて謝らせると、強引に椅子に座らせてしまう。そこまで見ると、店内の客と店員は元の落ち着

いた…というより無視するような感じの雰囲気を作りだしていた。
…ああ、しばらくこの店使えないかも。

とりあえず強引に席に座らせたスバルは落ち着こうとしてか、手元にあったコーヒー（グランデサイズのキャラメルマキアート、ガムシロップ追加）を一気に飲み込み、「ブハツ！」と吹きやがった！

「ちょ、お前何勝手に俺の飲んで嘔き出してんだよ！」

「だってサキお前ははいくらなんでも甘すぎるだろう！」

「んなことは無い！こっちのほうが十分良い感じだろうが！」

「はあ！？サキ味覚狂ってるんじゃないのか！」

「ウルセー！人の好みにケチつけんなよ！！！」

「お客様！」

「はいっ！」

「あんっ！」

突然かけられた声は、怒りのボルテージが上昇中の俺たちを一気に沈静化してくれる、

「とりあえずギャンギャン騒ぎ散らすなら出てけ！餓鬼ども！」

笑顔の鬼がいました。…ああ本格的にこの店使えなくなつた。

店を追い出された俺たちは、行く当ても無くふら付いた…何て訳でもなく、気付けば二人ともこの町でバスケのゴールがある所に足が向いていた。

道中かというと、店を追い出された直後はお互い口も開かず黙り込んでいた。でも最初に折れたのはスバルだった。どうもさっきの店での話の続きが気になつたらしい。それに応じるように、サキも口を開くようになり、続きを喋っていた。

「でも、信じられないな。サキが高校に入らなかつたって」

「俺もな、入れないとは思わなかつたけど仕方ないのさ。生活する

にはまず金がいるし。うちは稼いでくれる人がいなくなつたし、と
りあえず親の保険金とかにしても、まだ手元に来てないし、なんか
申請だのなんだの手続きが上手くいかないらしくてさ。ともかく学
校行くくらいなら、さっさと働いて金作んなきゃってなつたんだわ。
高校は金に余裕出来た時にでも、夜間とか定時の学校行ければなっ
てくらいにしか、今は考えられないよ」

「そつか。でも勿体ないよ。サキのするバスケって結構珍しいだろ」
「まあ、メジャーではないわな」

「あの時の試合はさ、サキ用の対策を練るので必死だつたんだ。そ
れこそ次の試合とかその前にやつた試合なんかよりずっとだ」

「へえそんなに俺って警戒されてたのか？」

「なんかそれについては純粹に嬉しい気がするよ。」

「ああ、俺が一番鍵になる試合はサキ達だと思つていたからな」

「確かに。そのお陰で俺はスバルのチームに僅差で負けることにな
つた訳だ」

「本当にラッキーな試合だつたよ。流れがどつちに転んでもおかし
くない、かなり綱渡りな状況だつたんだから…」

「そこでスバルの言葉が止まると、何故かお互い黙り込んでしまっ
て…。」

「気付けば目の前にバスケのゴールがあつた。ボールがなかったせ
いで一対一と洒落込む事が出来なかつたが、今そこでそのコートを
占有している連中を見て思わず俺は呟いていた。」

「スバル一緒にバスケ……チーム作らないか？」

「え？」

「いや。お前今のところ公式戦には出れないんだろ？でも、まだそ
のチームに未練があるのなら、バスケのと腕を錆びつかせるわけに
はいかないだろ」

「いや、でもな」

「じゃあやめるのか…バスケ？」

「俺はお前にはバスケ続けて欲しいんだよ」

「サキ……」

「スバルにはまだチャンスがある。高校での一年は確かに大きいけど、でもまだ試合に出れるチャンスはあるんだ。それにさ、もしスバルがチームを組んでくれるなら、俺も、俺もまたバスケットができるかもしれない」

「……」

「いや。突然一人で熱く語ってゴメン。でも、俺……やっぱりなんも無い」

黙り込んでしまった俺たちは、そのままコートにいるチビツ子達のバスケットを眺めた。チビツ子達が帰るまでずっと……。

そんな事があった二日後。スバルからメールがあった。

【差出人：スバル

件名：この間のこと

チームのこと考えてもいい。俺もサキとやるバスケットが楽しみになった。でも、条件が一つある。それを受けてくれるならだけど

】

そんな内容だったが、俺としてはスバルとバスケットができることが本当に嬉しくてとても楽しみだ。けど、ここに書いてある条件って……？

【宛先：スバル

件名：ありがとう

素直に嬉しいよスバル。俺もスバルとバスケットができるのがメツチャ楽しみだ。それで条件ってなんだ？

】

スバルにメールを返信してつと、俺はとりあえずバイトに向かうことにした。家を出ようと靴を履いていたらスバルからメールが届いて、「それは家に来た時に話すよ」とだけあった。スバルよ、お前といった俺に何をさせる気だ？

第一試合 第一ピリオド（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

誤脱字あれば教えて下さい。

感想とかももらえると泣くと思いますwwww
では、次回まで〜^^b

第一試合 第二ピリオド（前書き）

投稿して早速お気に入り登録してくれた人がいたみたいで、ちょっと嬉しかったです。本当にありがとうございます。

第一試合 第二ピリオド

「ミサキっ！三番テーブル生中二つとカシオレ持ってけ！」

「りょうーかい！って、俺は厨房でしょ！」

「四の五の言わずとつと行け！」

「うへーい」

突然だが現在絶賛バイト中である。

スバルからのメールを貰った内容が少し気になりつつも必死に働いて、今日のおまんまを食べられるように頑張っているのだが……。

「すいませ〜ん。お待たせしました！生中二つとカシオレです！」

「カシオレ私です」

「ビールこっちね」

「あい。ありがとうございます。注文いいか？」

「はい、どうぞー！」

スバルの奴め、もったいぶったようなメールしやがって、気になつてバイトに集中できねーじゃねーか！

「…とりあえずこれで頼むわ」

「はい！ありがとうございます」

今の注文も合ってるかどうか知らん、まあ確認して文句言われてないから大丈夫だと思う。くっそ、なんだこのモヤモヤ感は！とりあえず会ったら一発ぶん殴る！決めた。とりあえずぶん殴るぞ！

今日のバイトはそれをモチベーションにバイトをこなしていきました。まる。

土曜の朝。午前九時。普段なら体調的に問題ないのだが、前日は遅番のシフトだったせいで、まだ眠気が残っている。ああ…眠い。

そんな事も全く知らない待ち合わせの相手が、ニコニコと爽やかな笑顔でこちらにやってくるのが見える。

「よぉ〜サキこっちブハツ!!!」

とりあえず、目的を達した俺の顔をとても清々しい、さっきまであった眠気もスツキリして、きつと良い顔をしているに違いない。それこそ横を通るお姉様型が見惚れてしまっくらい爽やかになっているはず。

「お、おいサキ…。俺が、いったい…何をした？何故に接的一撃のボディブローを、もらわにやならんのださ…」

「それは自分の胸に聞いてみるこつた。この超タワケ野郎が!」

「くそつ俺が何したって言うんだよっ!」

「さ。お前ん家行こうぜ!」

「何爽やかに決めてんだよ!これの意味あつたのかよ!」

「置いてくよ〜」

「置いてくよじゃない!つか場所知らないだろサキっ!」

そう言つて俺を追いかけてくるスバル。コイツの家に行くはずなのに、なんだか変な状況になってしまったような…。まあいいか。

「で、あのメールはなんなんだ?」

「まあ…実はな」

「すばるくん。いいタイミング。ちょっとお願いしてもいいかな?」

「はあ…いい加減くんづけやめてくれない?」

「う〜ん。まあいいじゃない。それよりもコレ。みほしちゃんに届けてほしいの」

「いやいやちょっと待ってよ。俺は今一人じゃないんだけど!」

そう言つて。スバルのお姉さん?的な人が俺の存在に気づいたらしい。

「初めまして。最近よくスバルと遊んでる、牧村未咲です」

「あらあら。ごめんなさい。みさきくんね、はい初めまして。すば

るくんの母です」

「……なんて？ハハ。今、母って言ったか？」

「え、あの、お母さんっていいました？」

「はい。すばるくんのお母さんですよ。みさきくん」

なに、じゃあ俺の耳がオカシクナツタワケじゃないのか……。

「すばるくと遊んでくれてありがとうね。それですばるくん、これをみほしちゃんに届けて欲しいの」

スバルの前に出されたやたらと大きな物体。なんぞコレ？としか言えないような物が突き出されている。

「なにこれ母さん？」

「みほしちゃんのお弁当。今日で最後になるらしいから急いで出てってしまったの。忘れてるのに気付いたのがついさっきで……、だからすばるくんお願いできない？」

突然スバルの顔が真っ青になった。何に反応してそうなったのかわからないけど、今の母親の言葉のどれかに原因があるのは違いな

い。
「なあスバル。お前の言ってた事が後回しでもいいなら、そのみほしちゃん？に届けるのを先にやってもいいんじゃない？幸い俺は今日休みだしさ、時間ならたつぷりある訳ですよ」

「いいのかサキッ！」

「あ、ああ……」

おおぅ……。なにこの喰いつきの良さ？なんなのさ一体……。

「わかった！じゃあこれ三姉妹の所にすぐ持って行くよ……！」

「はい。じゃあすばるくんお願いね」

手渡された弁当？を持つスバル。本当に弁当で合ってるのかそのサイズ？

「よしじゃあ行ってくる！行くぞサキッ！」

「ちよつと待てスバル！すんません失礼しました！」

俺は急いで飛び出して行くスバルの自転車の荷台に飛び乗ると、

「重いぞサキ！」

「知るか！てか急ぐんだろ！キリキリ漕げ！」
スバルが目指す目的地に向かった！

「はああああああん、激しいっ！激しすぎるっつ！」

「うふふ、まだよ、まだ！これからもつと、もつと凄くなるんだから……。さあ、一緒にイクわよ……！今よりさらなるたかみへ昇りつめ、そして堕ちていくの……！」

スバルが急いできた場所は、よくわからんがともかくどこかの小学校らしい……、しかもちよつと高い感じがする学校だ。そんな場所にやって来た俺たちを待っていたのは、幼い子供たちの学び舎である場所では憚れる様ないかがわしい言葉の数々。白昼にも関わらず、激しい息遣いに卑猥な言葉。その発生源が体育館となると、あらぬ妄想をしてしまっても仕方ないと、俺は考える。

考えるが……。

「ママさんバレーじゃねえか！」

激しく同意。逆にあらぬ想像の方であっても困るけど……。

隣で叫んだあと、スバルの奴は見事なorzをかましてくれた。つたく、一体なんなのさ？とりあえず弁当以外の目的が、ママさんバレーで無いことは確信したけど。

「あつれ〜昂じゃん。珍しいなにしてんのー？」

どこから現れたのか？チビツ子ストレートの……多分お姉さんだろ
うか？えつとミホ姉だっけ？

「あ！そっかそっか。お弁当届けてくれたんだよね。サンキュー。
で、あんたはさつきから何してる訳？」

「笑え……笑ってくれよミホ姉。この無様な姿をいつものように笑い
飛ばしてくれよ！」

「いやいや。もうそこまで行ったら、笑いたくても笑えないよ……無
様すぎて。もう、とにかくこっちに来なっ！」

自分より大きなスバルを担ぐようにして、ミホ姉という人は運ば

うとする。けど、まあ二十センチくらい差がありそうだから、ちょっと四苦八苦してるようにも…て、俺がやればいいのか。

「俺やるから場所教えてくれませんか？ミホ姉さん？」

とりあえず、ミホ姉（仮）の反対側から屍スバルを、「よっと」と掛け声一つでもちあげる。

「えっ！えっ！ちょ、ちよっとアンタ！？」

「まあそれはこの馬鹿運んでからにしましょう。んで、どこにコレ運びましょう？」

「あ、ああ。じゃあとりあえずこっちで頼む」

「アイマムですよ」

えっちらおっちらと、このフレッシュな屍を体育館入口の付近の外に、

「そ〜らよ！」

放り投げてみた。

「ぶべっ！」

スバルよ…それは一体どこの漫画のキャラだ？

「つか、いい加減起きろ！じゃねーと…とりあえず蹴ってみるか？」

「やめい！調子に乗りすぎじゃないかサキツ！」

「いや。男相手にそこまで優しくしたら気持ち悪いだろ！それに優しくするならこっちにするだろ！って訳で紹介しろ」

「そうだ昂！この中性系白色イケメンを私に紹介しろ！」

「え…。なんでそんな息合ってたよ！初対面だろ！」

なんか圧倒されているなスバル。まあ、初めて会って仲良いように見えるのって、多分こういうことだろ。

「スバル（昂）を弄るのが楽しいからだ！」

「やっぱり相性バツチリじゃん！」

まあ、考えるだけ損ってもんさ。

「とりあえずミホ姉。こいつは牧村未咲。中学時代に試合のしたこ」とあるやつで、この間偶然会ってさ、意気投合しちゃたんだよ。んで、サキ。この人は俺の叔母になる人で、篁美星。この学校で教師

をしてるんだ」

「そうなんだ。初めまして、牧村未咲です。呼び方は…まあ美星さんに任せますよ」

「じゃあミサキって呼ばせてもらうよ。改めて、私はコイツの叔母で篁美星。呼び方は…まあ好きに呼んでもらって構わないよ」

「じゃあさつきも言いましたが、美星さんって呼びます。にしても、美星さんここで教師してるんでしょ？めっちゃ若いですよね」

「あはは！ミサキ、あんたよく初対面の女性にそんなと聞けるね。まあ私は気にしないからいいけどさ。私はこの学校に新卒で入ってまだ二年目だからね、そりゃ他から見れば若く見えるよ」

ケラケラと笑いながら答えてくれる美星さんだけど、肝心の年齢は答えてはくれなかった。まあストレートで行ってたら、二十二二十三くらいだと思うけど。

「それにしても昴。慌てた様子でここまで来てくれたって事は、まがりなりにもあいつ等の事気にかけてくれてたんだな」

「…ああ、まあ」

なんだかよく分らんが、スバルの奴が気にしていた事はどうやら美星さんも絡んだ事みたいだな事だけは把握した…。けど、やっぱりようわからん。『あいつ等』って事は、スバルの奴ここで誰か見てるってことなのか？もしかして俺に相談つてのも、そのあたりの事だったりして。

俺が勝手にそんな答えを出した頃に、スバルの奴が「任期は全うしたから」と言つて、美星さんの前から離れるところで…。その時見せた美星さんの顔が俺は少し気になった。

慧心の校内を出ようと移動する俺達だが、さつきあった美星さんとのやり取りが、スバルの中で尾を引いてるみたいで、少し苛立ったオーラが感じられる。こういつた時はなんであれ、近寄りぬが吉、

触らぬ神に祟りなして事は間違いない。

「長谷川さん！」

こいつの家に着くまで、だんまりを決め込もうと決意した時、突然勇者が俺達……いやスバルの前に現れた！

「……………智花」

突然かけられた声にスバルが反応し足を止め、釣られた俺も足を止めることになった。そして声が出た方を向くと、やたらとふわふわした服を着た、肩ほどまで髪がある少女が立っている。

「あの、長谷川さん、あ、あの今日はどうなされたんですか？」

「え……………ああ、あれ、ちょっとミホ姉に用があっただけなんだ。今から帰るところ」

「え、あ、そうなんですか。お疲れ様です。……………って、これは少し変ですね」

どうやらあの子は俺の事に気が付いてないらしい。まあ邪魔するのも可哀そうだし……。俺は止めた足を再び動かす。もちろん二人には悟られぬように。

少し離れた壁に俺は背中を預けると、二人の会話に耳を傾けた。

まあ離れたといっても十分聞こえる範囲内だからね。

まあ結論を言えば、あの智花って子がバスケの練習に来た方がいいが、使える場所がなく諦めようと思ったら、スバルの奴が家に来てバスケしない？って事になった。まあ知り合い同士なら問題ないけど、普通にやったらただの口り変態ですよスバルよ……。それよりもだ。

「スバルよ、俺はどうしたらいいのさ？」

「ふえ！」

「あ……サキの事忘れてた」

「お前な……。しかもお前チャリじゃん。しかも一台で来てんだぞ？」

「……あ！」

「『あ！』じゃねーよ……ったく。一応話は今日の内がいいんだろ？」

「じゃあ俺は先に歩いてお前んち向かってる」

「すまんサキ。でもお前道わかるのか？」

「まあ…大体覚えってから大丈夫？迷ったら電話するって」

「そか。じゃあ悪いけど先行っててくれ」

「あいよ」

俺は手を振って先にスバルの家路へと歩き出した。後ろじゃあスバルの奴がちビツ子待たせてチャリ持ってくるって言ったり。ちビツ子がサキ！サキ！なんて言ってるやたら慌ててたけど…どうでもいいよね、正直。とりあえずちゃちゃつと行きますかね。

結果を言おう。そりゃもちろん抜かされましたよ。スバルの後ろに乗っていた子が不慣れとはいえ、簡単に抜かれた訳ですよ。しかも乗せてるスバルの奴は何故か緊張した様子に見えたし。あれが後ろの子を落とさないためなら良いが、違う意味であつたらと考えると…俺早めに縁切りした方がいのか？なんて考えてしまう。いくら年の差が五年ほどしか離れていないとはいえ、相手は小学生だぞ…。これは幼女愛者としか言いようが無い。

そんな繊細な俺の心を砕こうとするスバルの行動に悩まされながら歩き、ようやくスバルの家に着いてみれば、結構リズムの良い音を奏でているボールの音が入った。

「んだよ、スバルのやつ。何ちビツ子相手に楽しんでるんだよ！」

俺は勝手にスバルの家の庭に入ると、縁側に腰を掛けのんびりと観戦を決め込むことにした。…にしても、あのちビツ子集中しすぎて回り見えてないんだろな。スバルは一瞬見こっち見て笑いやがったし、多分俺には気付いてるでしょう。

「あら、みさきくんも来たのね」

後ろのドアが開く音と俺を呼ぶ声がしたので振り返れば、スバルのお母さんがニコニコと笑っていた。

「あ、お邪魔してます」

「いゝえ気にしないで。そうだみさきくんお腹空いてない？良かったらごはん、食べていってね」

「え、いいんすか!？」

「もちろん。たくさん食べてね」

「すみません。じゃあ遠慮なくゴチになります」

「うふふ。やっぱり若い子はそうじゃないとね」

ルンルンと鼻歌を歌いながらスバルのお母さんは部屋の中に戻って行った。さて、そうになると御飯が楽しみになるな。普段は出来合いの物が多いし。勝手に期待させてもらいます。

「動きが雑になってきたね？そろそろ限界かなー？」

「そんなことありません!」

…にしてもだ、この二人実に面白いバスケをする。スバルの方はほつとくとして、あのチビツ子の年代だと、かなりやる方に入るんじゃないか？しかも女子であんなんだろ。このまま伸び続けるなら、正直将来が恐ろしいわ。は………なんにせよ今の俺には目の毒だわ。

「うう……………」

俺の隣にいる少女 湊智花は、しょんぼりとしながらスバルの母 なゆさん特製のバケットサンドに嚙り付いていた。

「まあ仕方ないって。年季が違うんだし」

「そうそう!」

「ツチ!」

「残念だったなー」

「っそが!サキもつかいだ!」

「そんな熱くなんなよスバル」

「熱くなつてない!」

「いやいや。なってるって!」

「あ!おまつ!」

俺が投げたボールは綺麗な弧を描き

ませんでした。少し無理

に打ったせいか、直線的な軌道で飛ぶ。しかし、それは俺の狙い通りで、バンクにぶつかったボールはそのままゴールになだれ込んでいった。

「うっし。これで俺が二つリード。これでリーチかな」

「サキ。お前ずるいぞパカパカ離れて打ちやがって！それにこんなにディフェンスが上手いんだよ！」

「それは秘密ですよスバルくん」

「……ライアー」

「え！なんでこのタイミングでそれ言うのさ！こんなチビツ子に聞かれると恥ずかしいでしょ！」

きゃんきゃん言いながらバスケットをする二人。その様子を見る少女。まあアレですよ。二人がやってるのを見て俺が我慢できなくなった訳で…。現在智花をそっちのけで三本先取のミニゲームをやってます。今のところ2 - 1で俺がリーチ。

「実際そうだろ！お前どんだけ隠してんのさ！」

「んな隠してな、い！」

スバルの切り返しになんとか対応し、後ろに抜かれないうようにするものの、あの野郎重心が振れたのを良いことに逆側に飛んで、しかも後ろに飛びながら フェイタアウェイ シュートしやがった。あっちも無理に打ったから入らないと思えば、リングに二回ほど嫌われたあと、ネットに吸い込まれていった。

「これで2 - 2だな」

「ああそうだな」

熱くなる二人。その横でバケットを頬張りながら呆ける少女。

俺がボールを持ち、そのボールをスバルへ。そのボールが俺の手元に戻ってくれば、俺のターンでゲーム再開になる。

パシュツ……………。

乾いたネットの音がその場に残る。

「あああ！」

「うっし！」

突然両者から悲喜相対する咆哮が放たれた。

「うわああ……」

少女の方からもこの結果は驚きだったようで。

まあ何があつたかと言えば、こうだ。ボールが俺の手元に戻ってきた。その時のスバルのパスは少し気の抜けたもの。手元に着いてからきつちりやろうとしたんだろう。そこを逆手にとって、手元に来た途端にシヨットしてやった。それがネットの中央、リングにはノータッチでゴールに吸い込まれた。以上！

「サキ！もう一回だ！」

「嫌だね！俺はこのまま勝った気持ちよさに浸りながら、なゆさんのバケットサンドを食べるんだ！」

俺はさっさとその場を逃げ出して、

「なゆさん俺にもサンドください！」

「サキ！逃げんな！」

「やなこつた！」

「はいみさきくんの方ですよ」

「ありがとうございます！ああうめー！勝利した後はさらに格別だ！」

俺はなゆさんから渡されたサンドを頬張り、味に満足、量に満足、そして歓喜の美酒に満足。久しぶりに良い気分だ。

「母さん俺にもサンドくれ」

「はいはい。すばるくんもお疲れ様」

そう言つて何個かのサンドを入れた皿をスバルに渡していた。

「それにしてもお二人とも凄かったです！」

「ありがとう！」

「はは…ちよつとみつともないとこ見せちゃつたかな」

「そ、そんなことないです！」

必死で否定する智花だけど…多分それは逆効果じゃないかな？ほらスバルの背負うおオーラが禍々しい意味で濃くなつたよ（笑）

「あの、お二人のゲーム見てたら、やっぱり勝てないって思います

た……」

そりゃ、小学生に簡単に負けてやる程、二人とも負ける気はないからね。

「……なあ智花。何で智花はあの部にいるんだ？前は別のチームでバスケしてたってミホ姉に聞いたけどさ。……そこを抜けてどうしてあんな初心者のチームに？」

「昴さん。あの、実はわたし、一度辞めたんです。バスケ……」

あれ？なんか真面目な話が始まっちゃったけど……。俺関係ないはずだよな？てか、あんまりシリアスなのは勘弁なだけ……。……。

「……あの昴さん。未咲さん。私の話聞いてくれますか？ちよつと長くなります、でもちゃんとお話したいんです。きつと面白くないです。でも、もう会える事が無くなるかもなら、ちゃんとお話してお別れしたいんです。もつとみんなの事知って欲しくて、私が大好きなみんなの事知って欲しいんです」

ああ……。逃げ道が無くなりました。はあ、じゃあしつかり巻き込まれましょうか。ただしスバルの奴には制裁が必要かもな。

智花の話はこうだ。自分が前にいた学校では、自分がバスケットを頑張りすぎ勝ちにこだわって、それを周りにも押しつけてしまいチーム状況が悪くなって孤立してしまった。

それで色んな事がダメになってしまい、今の学校、つまり慧心学園に編入したらしい。まあ、あれだけの实力を持って周りにも要求したら、周りから反感を買ってしまうのは仕方ないかも……。……か。

それで慧心に来てからは、バスケットをせすにすることに安心して過ごせていたらいいが、それでも浮いていたらしい。それを見た美星さんが気にかけて色々やったらしいが、智花はそれを無視……。とまではいかないが放置した。そんな時、美星さんがバスケットのイベントを授業中にやったらしい。そこで事件があった。慧心にある男子バスケット部のメンバーと智花が一悶着起こしたらしい。一悶着の結果は、

男子バスケット部を智花一人であしらってしまう形で幕を下ろしたらいい。

その時の試合を見ていたクラスメイトがバスケットに興味を持ち、美星さんが顧問をする女子バスケット部が生まれた。

ここまでしてもらえれば、バスケットに嫌気がさしていた智花でもやる気を取り戻すのも納得だわ。てか、美星さんやりすぎだろ。

まあそんな訳で、今年から活動が本格的に始まった所で問題が起きた。内容は練習日によるものらしい。細かいことは知らんが、来週末にそれを決める試合が行われる。スバルの奴は、中学の時実力と、七芝バスケット部の現状もあつて智花達のコーチを一週間の期限で受け入れ、ここに至る。と、いうことらしい。

それでもって、もしこの試合で女子バスケット部が負けることになれば、智花はバスケットを本気で辞めるらしい。そこまでの決意があつた。

「で、スバル。どうすんだ？」

「ああ……」

智花は外でシュート練を黙々とこなしている中、俺はスバルを家の中に連れ込み、智花の様子を見ながらスバルに詰め寄った。

「ああ……じゃないだろ。つか、お前が相談したかった事って、この事じゃないのか？」

「……ああ。実はそうなんだ」

「やっぱりか。でも、相談内容はもっと軽かったんだろうな。メールが来たのは結構前だったし。」

「あのさ、お前がメールがくれたのってどのタイミングだった？」

「うん。それはミホ姉にやってくれないかって言われて、実際にあの子たちの様子を見に行ったあたりかな？それか、行く前日か。そのあたりだよ」

「そっか」

「やっぱり込んだ重い内容とは思ってなかったんだな。てか、そこまで話す訳もないか。美星さんもタチ悪い事するな。」

「で、どうすんだ？あの子、いやあの子達か。きつとお前の事頼りにしてんぞ」

「…そうだな」

「こんなやつだっけ？まだ付き合いは短いけど、俺が知ってるスバルはもつと熱くて、結構攻撃的なんだけどな。多分スバルの中では答えは出てると思う。何を気にしているか知らないが、あと一步が踏み出せない。今のスバルはそんな風に見える。」

「なあ……なにがそんなに煮え切らないのか分らないけどさ。俺はさ、俺みたいな事になったり、お前みたいな思いになっちゃう事が止められるなら、それに手を貸してやってもいいんじゃないかって思う」

「……サキ」

「まあ後はお前次第だけど」

俺はその言葉だけ残すと、智花の様子を見に縁側に一人降りた。でもスバルは後を追ってこず、一人何かを考えていた。

「長々とお邪魔してすみませんでした！」

「ぜんぜんよー。ホントなら晩ご飯もみさきくんとかと一緒に食べていって欲しかったのに」

玄関口で元気よく頭を下げている智花に対して、なゆさんは本当に残念そうに。スバルの奴はまだ何か渋ったように見える。

「シャワーまでお借りしてしまい。本当にありがとうございます」

帰ろうとする智花になゆさんが話しかけて、中々帰るタイミングが見つからないのか、智花がちょっと困った笑顔を見せている。

「……あの本当にお邪魔しました」

今度こそつて感じで智花が頭を下げ、長谷川家の門扉に手を掛け、とうとう帰宅の途に入ってしまった。

スバルやっぱ駄目なのか？伸ばされた手を叩き落とす。俺にはそうは見えないんだけどな、スバルの事。

「ねえ。すばるく」

「母さん。晩飯だけど四人…いや、その馬鹿と俺が食うから六人分用意して」

「はい。分りました、すばるくん、しっかり用意しとくからね。じゃあ行つてらっしゃい」

その言葉を残すと、スバルの奴は門扉を開放つて、智花の事を追いかけて行つた。

ああ…スバル決めたのか。最後の一步ようやく踏み出せたか。これで、少しは面白い展開になるんだろうな。現状戦力はどうか知らないけど、智花達が引き込んだのは、あの「桐原中の知将」だ。きつと愉快的結果をもたらしてくれるハズだ。そうと決まれば、

「なゆさん。晩飯作り俺も手伝いますよ」

「あらあらいいの？」

「はい。これでも飲食店で調理のバイトしてるんです。下ごしらえくらいなら手伝いますよ」

「そう。じゃあ頼っちゃいましょう」

「どうぞ遠慮なく。それより、美味いもんにしてあいつ等喜ばせましょう」

「そうね〜」

ニコニコ笑うなゆさんに満足な答えを見た俺は、この気持ちを一杯表わすために、二人が喜ぶような物を作りキッチンへと向かうのだった。

【差出人：スバル

件名：明日だけどさ

なんとかして家に来れないか？ちよつと相談があるんだよ。無理かな？

【差出人：サキ

件名：RE

無茶言うな！俺のバイトが夜だつて分かつて言つてんだろな？時間が無いのはわかるけど…。せめての妥協点だ。明日バイト少し早めに上らせてもらう。

んで、お前んちに泊める。きつとどんな急いでも、そっちに着くのは二十三時すぎるしな。んで、着いたら電話するから中に入れてくれ。それでいいならそっちに行く。」

【差出人：スバル

件名：わかった

それでいいよ。お前も生活かかつてるしな。っていうか、サキが働いてる時間が夜だつて聞いてないぞ！それは間違いなく初耳だ！ともかく明日は頼む。

】

第一試合 第二ピリオド（後書き）

のんびりと投稿していきますので、のんびり待っていただけると嬉しいです。

誤字報告があったので、誤字部分を変更しています。

2011/10/13

第一試合 第三ピリオド

「ようスバル。こんば」

「バイトお疲れサキ」

「すまん家に寄る暇すらなかったから、ちょっと臭うかもしれんが勘弁してくれ」

「じゃあシャワーでも浴びてきたら？その間にこっちも準備しとくし」

「ありがとな。あ、なゆさんこんばんは、お邪魔します」

「あらあら。こんな遅い時間にいらつしやいみさきくん。こんな時間に出歩くなんて不良さんですよ？」

現在時刻二十三時二十五分。確かにそう見られても不思議ではないけど。

「いやいや。バイトですから、俺は。それにもし捕まることになったら、俺を呼び出したコイツ恨みますから大丈夫です」

「お、オイ、サキっ！何言ってるんだ！」

「いや事実じゃん。すいませんそんな訳でシャワー借ります。あと、タオルも借りますね」

「いいわよ。使ったら洗濯カゴの中に入れてくれたらいいわ。あ、着替えは？」

「着替えは大丈夫です。一応持ってきましたから」

「そうなの。じゃああんまり遅くならないよう程々にしなさいね、すばるくん、みさきくん」

まあ、シャワーに行く前になゆさんにそう言われたものの、そう簡単に寝れる訳がない。

「どうだ？」

「やっぱり上手いよ」

「だよな…」

「なんか抜くよりも、入れたままの方が上手くイキそうじゃね？」

「それは後ろからした時だろ。やっぱり初めは前から行くべきだ！」

「でもスバルは上からがいいんだろ？」

「そりやできれば上からの方が楽だし、初めから前で激しくヤツた所でうまくイケないだろ」

「そりやうまくイツて出せりや気持ちいいだろうけど、そりや理想だろ」

「いや、多少無理でもそっちの方が良いと思う」

俺とスバルは二人で必死に画面を見つめ、熱く各々言い合うが、やはり好みが違う俺たちに交わるところが無いのかもしれない。

え？男二人が夜も遅くにテレビしかもDVDを見て熱く好みを語り合うって卑猥？いやいや何言ってるんだか。

「つか、やっぱりそうそう穴なんて無いよ。ここの男バスそこそこやるよ」

スバルが前日に美星さんから借りてきた、慧心学園男子バスケット部の試合と練習風景を映したDVDを見ての敵戦力と、スバルから聞いた現戦力との比較と対応についての意見交換だったりする。

「で、やっぱり技術はついてこなかったから、その」

「愛莉。香椎愛莉」

「そうそう。その高さのミスマッチを狙ってポストプレーをやらせる訳だ」

「ああ。でも、サキは智花にフォワードとポイントガード…ポイントフォワードだったけ？をやらせたいと」

「ああ。序盤の動き次第だけど。とりあえず智花に集中したところで、パスを回して男バスを引っかき回す。ボロが出た所でミドル、

ポスト、智花が決めに行く」

「でもそれは正直難しいな」

「難しい、ね…」

「まあサキの案も含めて考えてみる」

「そつか。それにしても、男バスのやつらはちゃんと組織だったバスケが出来るんだな。このレベルなら、組み合わせ次第じゃ県大会でもいい成績残せそうな感じだ」

「ああ…。今回は結構な壁だと思ってるよ」

「熱くなつてんねスバル。お前も混ざりたいとか思ってたんじゃないか？」

「わかる？」

「わからないでか」

お前は分かりやすいからな。感情がすぐ前に出てくるなんてさ、お前が知将じゃなく闘将つて言われるんだよ。

お互いニイツと笑う。子供が悪戯を思いついたようなあの顔だ。

「じゃあ俺は当日まで多分手伝えないと思うから、スバル頑張れよ！」

「ああ任せとけ。面白い試合にして見せるさ！」

そんな感じで夜は更ける。男バスの更なる穴を探すために……。

試合予定日二日前。つまり今日は祝日の金曜日。何とか休みも取れ、スバルから今日は一日慧心の体育館で練習しているというメールを貰い、その様子が見たいと美星さんに相談したところ、

「イシシツ。これで完璧だ！」

「何が完璧なんですか！」

「だってコレ、最高だろ！」

「うん。みさきくん可愛いですよ」

いやいや。そういう問題じゃないと思うんだが。

牧村未咲。 現在女装をしております…。ちなみ原因は言わずもがな、ここにいる美星さんな訳です。

美星さんに慧心に行きたいとなゆさん経由でお願いしたところ、何故か目の血走った美星さんが某峠屋よろしくな勢いで長谷川宅にやって来て、あっちゅう間に黒髪ロングでストレートな女子が生ま

れた訳です。ちなみに無駄毛は薄い方なので、特に処理する必要がなかったらしい。…嬉しくないよ。

「で、これは一体どういうことか説明してくれるんですよね？」

至極もつともな俺の疑問に、美星さんは当たり前のようにこう答えました。

「やってみたっかたし。それに絶対面白くなるとー確信があったんだよ！」

だそうです。面白い事に巻き込まれることは、全く問題が無いんだけど。でもこう自分に被害が大きいと考えないといけない。流石にこれは予想してなかった。てか、予想できるか！

「だからってコレはないでしょう！」

「そう言ってもねえみさきくん可愛いわよ」

「なゆさん…そんなこと言われても全く嬉しくないんすよ」

若干の拗ねが入ってきたが、これには理由もあるらしい。

「まあ実際のところ、既に昴のおかげであの子達にもある程度の男の免疫はできていると思うんだ。けどな、愛莉辺りがまだ怪しくて…。それに、私が若い男ばかり女バスに連れて行ってたら、また変に勘繰られるかもしれないだろ？ミサキは昴と違って、親戚関係とかでもない訳だしな」

確かにそう言われると納得してしまうような…。うん、保護者からしても、スバルは美星さんの甥っ子っていう立場で安心を与えられるけど、俺なんかどこの馬の骨が分らんしな。それなら若い男イコール危険人物になってしまうのはどうしようもないか…。でもだからって女装はないでしょ…。

「いいじゃん！これなら私の知ってるバスケのできる友人辺りで押し通せるから」

「そうは言いますが…はあ、背に腹は代えられないか…。分りました。これで行きますよ。どうせ時間も押してるんですから」

「そうそう。諦めは肝心ですよ。て訳で、行ってくるね」

「はい。じゃあみさきくん、これみんなの分のお弁当。しっかり運

んでね」

「了解です。じゃあ美星さん行きましようか」

「オツケー」

結局納得は出来ないものの、美星さんが調達してくれたスーツ（女性用スカートスタイル）を身にまとい、俺はスバルの育てている女バス部員の現状を見に行くことになった。

さあ…準備はいいか？精神力ゲージはフルに回復しているか？

そうか。ならば向かわん己が死地とならん場所へ！

「みんなやってるか？」

開かれた扉の向こうには六人、一人は言わずもがなスバルの阿呆だ。次に、この間スバルの家で見た智花。次は背の高い…おっとこれは禁句らしい。ともかく長身ですぐ目に入った香椎愛莉。って、ホントおっきいな俺と同じ？まだ上か？んで、ふわふわした可愛い子が袴田ひなた。あっちでシュート練しながら言い合いをしているのが三沢真帆と永塚紗季ってことか。

「おゝ。せんせ〜だ〜」

扉の近くにいたひなたが一番早く反応して、それにつられるようにスバルや他の子達も、こちらの方に視線を向けた。ああ…子供の視線だというのに何だろうこの恐怖感は何？

「お疲れお疲れ。みんなに差し入れ、お昼ご飯持って来たからもう少ししたら食べような」

それを聞いた三沢はシュート練そっちのけで喜んで。智花もちよっと嬉しそうだ。……それよりもだ。

「みーたん。隣にいる人…誰？」

ついに来た！開けてはならぬ者に触れるでないよ、見た目通り好奇心の塊よ…。

「そうそう紹介するね。この人は私の友達でバスケットのできる人。ミサキっていろいろよろしくね」

「…よろしくね」

この時ばかりは、それほど低くならずに着いている声変わりを恨むしかなかった。

「おー、みさきちって」

「はぁー！ー！」

真帆が俺の呼び名を宣言しようとしたと同時に、スバルの雄たけびがそれを打ち消した。

「お前サキかッ！何してんだよ！」

「いいだろ！好きでこんな恰好してる訳じゃないんだから」

「ちよつと来いよ！」

「な！待って　！」

俺を無理矢理連れ出そうとする後ろで、「おお！スバルの恋人か！」とか「あわわわわわ、」サキってサキって！？」と慌てふためくものや、「みさきさんって女の人だったんだ…」なんて勘違いするものと、中々收拾できないような混沌が広がった。「

ともかくスバルによって外に連れ出された俺は、スバルに胸倉（偽乳入り）を掴まれ説教されています。

「それでサキ。いい訳は？」

「全ては美星さんに言ってくれ…」

「……ああ。確かにそれは逃げられないか」

よく分らない納得をされてしまった。けど美星さんイコールそういう存在というのは理解してしまう一面だった。

「あとこの体勢は、はたから見るとスバルが暴漢にしか見えないから、気をつけた方がいいと俺は思うぞ」

そう言っただけ。現状確認。脳内スバル判定装置：アウト（予想）となつたのか、一気に俺から離れた。

「お前は俺の事男と分かってるからだけど、美星さん謹製の変装だからはたから見た時の状態って、きつと新任女教師を襲う、高校生

みたいな感じになるんじゃないか？」

そうスバルを茶化すと、真つ赤になっちゃった…ってオイ！

「本気にするなよ！」

「いやいや！そういう言い方したら間違いなくそう見えるって！」

「はあ…ともかくも正しいだろ！この服はそういう事でこうなった。以上！ほらほら早く戻ってなゆさん特製の弁当でも食べよう」

もうメンドイこれはどうしようもない悪夢なんだから…いや、まだ続くのか…。

ともかく気分入れ替えるためにも飯だ飯！

午後からの練習メニューは攻撃パターンの刷り込みだった。現状戦力として期待できるのは、真帆と紗季のミドルからのシユート（位置限定有り）と、智花のワンマアミーだけ…。愛莉はまだ不確定要素が大きすぎて期待するには難しい。ひなたは…まあ色んな意味で酷だわな。

さてこの現状でどう使い回すのか…。俺もこの子達に武器を渡したい所だけど、今の彼女たちには過ぎた武器しか持ち合わせていない。持たせて混乱させようものなら腹切りもんだ。やっぱり俺には手を差し伸べてあげる手段はないのかな…。まあせめてだ、この後スバルの家に行つての相談には聞く事にしよう…。

この日一日の練習内容を消化して、女バスの子達と挨拶を終えると、俺とスバルは真つすぐに長谷川家を目指した。スバルは家に帰るだけだが、俺はこの格好になった時、来ていた服を全部スバルの家に置いてきたのだ。この格好のまま帰る訳にもいかないし、化粧もされているので何よりそれを落としたいし着替えたい。

そんな訳で、長谷川家に到着して直ぐに俺は風呂場へと直行させてもらった。もちろんスバルには承諾済みだ。

お互いシャワーを浴び終わると、なゆさんの謹製の夕食を頂いた。もちろん食べながら女バスのチームについてどうするのか、あーで

もないこーでもないと議論しながらだ。食べ終えたら食べ終えたで、スバルの部屋に行き男バスの弱点がないか、切り崩していくためにはどうするべきかを、OHANASHI寸前になりながら熱く語りあって、気付けば朝日を拝む事になってしまった。ここまで来たら仕方ないので、当日の予定だけ確認して、あとはスバルに丸投げし、なゆさん謹製の朝食をしつかり頂き、家路についた。ちなみにこの日のバイトは、スタートからラストまでびっちり埋められていて、家に着いたのは早朝五時となった。……休日前の居酒屋は本当に恐ろしい。

このまま寝てしまおうと確実に間に合わないので、シャワーだけ済ますと、必要なものだけ手に持ち、早速スバルの家に向かった。

さあ…試合開始のブザーが鳴るまで残り四時間だ……。

第一試合 第三ピリオド（後書き）

初投稿から大体一週間になりました。それまでにPVが2500を超え、ユニークも500を超え、感想も貰えて嬉しい限りです。

これを励みに頑張っていきますので、これからもよろしくお願いします。

誤字報告があったので、一部変更しています。 2011/10/

13

第一試合 第四ピリオド

「やっぱり止めた方がいいのかな…」

「スバル今さら何言ってるんだ！そんなもん考えるのは、試合が終わってからで十分だろ！」

「……」

「後悔するも何もな、結局は今から始まる試合の結果次第だろ！終わった後にこうしていればっていう後悔を、今の段階で考えるくらいなら、今持つてる手持ちのカードを全部使い切ってからすればいいだろ！」

「たたく、こいつのいい所は一度決めたら大胆に行動できることだけど、悪いところは中々踏ん切りをつけれないところだ。…良い意味では慎重って言えんだろうけどさ。今この場では、これから始まる試合にはそれは必要無い。」

車を運転している美星さんも何か言いたげにしていたが、俺が喋っているのを見て何も話そうとはしなかった。

「スバル。お前が後悔するようなことは、あの子達からの信頼を裏切ることと同じ。俺はそう思うけどな」

最後にスバルを突き放すように言葉を投げ捨てた。

「あとはお前次第だよ」

そう締めくくったけど、前回同様の女性用スーツ（スカートタイプ）を身にまとっている訳で…。なんか締った気がしねー…。

「おや、ようやくのご到着ですか？ 篁先生。てつきり生徒たちを放って逃げたのかと思いましたよ」

美星さんの顔を見るなり挑発してきた中年教師…多分これが美星さんが言っていたカマキリって奴か。

俺は美星さんが何か言い返す…ていうか絶対反撃すると思ったんだけど、

「おはよー真帆。どこにご飯ついてるぞ！ん〜これはコシヒカリかッ！」

「ぎゃー！みーたんにデコチュー奪われた！責任とつて！」

さらつと無視して、真帆に絡みに行っているし。おお…美星さんあんなにサラツと流すことができるなんて…正直意外だわ。

「…ツチ！まあいいでしょう、今日の私は機嫌がいいですからね。今日で下らない争いも終結。これでわれわれ男バスが体育館を有効活用できるのですから。あなた方は最後のお遊戯でも楽しんでくださいよ…では」

捨て台詞を残し立ち去ろうとするカマキリさん。一瞬こちらに視線をくれたので、ニイッと口角を吊り上げ不敵な感じに見えるよう挑発してやる。

それに気づいた見たいのカマキリさんは、少し怒りを増大したみたいだ。これで沸点が下がって、少しでも試合中に冷静な判断が出来なくなればいいけどな…。

「ミサキ。あんた結構いい性格してるね」

「それは美星さんも一緒でしょ」

もちろんなんて言いながら、クククと笑ってみせる美星さんは、どこかの悪の組織の幹部に見えてしまうのは何故だろうか？

「それでスバルは？」

「ああ…最後の打ち合わせをやりに行ったよ」

「…美星さんは行かなくて良いんですか？」

「ああ。私が行ったところで何もできないしな。それに何をやるか知ったら面白くないじゃん」

「それは納得です」

「そういうミサキはいいのか？」

「…俺はあの子達と同じ時間をそんなに過ごしてないですから。その場にいたら、逆にあの子達を緊張させてしまいかもしれないです

し。それにスバルとあの子達の事信じてるから…俺は…」

「そっか」

「はい。それにこれは最後のミーティングじゃなくて、これから何度もあるミーティングの始まりですよ」

「ああ、そうだな」

舞台は整った。あとはスバル、お前の演出次第だぞ！

厳しい顔をしたスバルがベンチに戻り、両チームの選手がコートの中に散っていく。さあ、これから始まる戦いは、君たち自身で勝ち取らないといけない。

それが始まった！

ジャンプボールでスタートした試合は、智花がボールを弾きだし、た事で火蓋が切られた。

先制攻撃。相手の機先を削ぐためにも、ここでの一本は確実に欲しい所だ。

「よっしゃー！」

首尾よくボールは真帆が勝ち取りそこから智花にパスが行く。当然、男バスもカマキリさんもこういう展開は織り込み済みなハズ。後は。

「愛莉！」

智花から愛莉へとパスが通る！

さあ見せてくれ愛莉。スバルもちゃんとやれたんだろうな？その結果がどうなったのか教えてくれ！

「はい！」

パスを受け取った愛莉は、躊躇なく振り向くと、練習通りのフォームでボールを投げた。障害になるはずのモノが無い、愛莉だけに許された空域。結果、こちらからの男バスへの最初の襲撃は見事成功を収めた。

男子0 - 2 女子

「やったぜアイリーン！」

「愛莉すごかったよ！その調子でお願い。どんどんボール回すから！」

「うん。…私、私がゴールを決めたんだ…」

「ほら愛莉、試合はまだ始まったばかりなんだから！」

「あირりすごい。そのちょうし〜」

「う、うん。わたし頑張る！」

仲間からの惜しみない賞賛に、少し浮ついていたのか、それとも不安になっていたのか、少し地に足がついたように見えた。

さらに今のプレーで浮足立った男パスの際を見逃さず、智花がボールを奪いとると、また愛莉にパスを回し縦続けにゴールを演出させた

男子0 - 4 女子

「なあ…ミホ姉、スバル。俺は多分最低な事をしていと思う」

突然の独白に美星さんは驚いている。たぶんこれだけじゃなくて愛莉の行動も重なってだと思う。

「昂。お前愛莉に何したんだ？多分そのことだろ。種明かしをしてもらわないと、それだけじゃ正直困る」

確かにそうだろ。美星さんは今回の作戦のカギになるこの事は知らないんだから。

「ミホ姉、俺、愛莉の事騙してる。せつかくサキに背中を押ししてもらったのに、それでも後悔してる。でも愛莉の資質を見て、楽しくなってる自分もいる」

「要点だけ言え」

美星さんの切れ上がった睨が、さらに鋭利になってスバルを睨みつける。

そこからスバルの独白が始まった。

「一昨日、サキと話してやっぱりこの試合の序盤の流れを掴むには、愛莉のが必要になるって結論になった。

でも今のままの愛莉じゃ、全く使えない、使う事が出来ない。だからサキの提案で愛莉の事を騙すことにしたんだ」

そう。今回愛莉を騙すにあたって、作戦を組んだのは全部俺だ。少し甘いところのあるスバルじゃ、思いついた所で、実際に実行できるかが少し不安があったから。

「試合前にみんなを集めてミーティングをした。その時にサキと考えていた作戦を実行した」

「なにをしたの？」

「簡単ですよ。愛莉に嘘を刷りこませたんです」

口出してしまった。おいしいとこ取ったかな？せつかくスバルが喋ってたのに。美星さんと言えば、こちらに鋭い視線を送っている。ちよつと怖い…。

「バスケにはスマールフォワードっていうポジションがある。でも愛莉にはセンターっていうポジションをやってもらいたかった。だから、あえて愛莉にスマールフォワードのポジションを与え、ゴール下で得点を狙い続けるセンターとしての役割をやってもらう事にしました。」

その為に愛莉にはスマールフォワードの役割から逃げないよう…楔を打った。それは、…愛莉のコンプレックスを利用したもの。

愛莉は自分が『大きい』という事に対しての反応が強い。それと愛莉にはバスケに対しての知識は多くないが、それでもセンターはどういった人が、そのポジションになるかは知ってる。

だから、『大きい』という意味のある言葉に言葉に反応する愛莉にスマールフォワードで与えた役割が出来なければ、『ビッグマン』という称号を持つセンターに変更すると念を押しした……」

スバルがそう言い終わると、美星さんが渋い顔をする。

「だから必死になって、愛莉はスマールフォワードの役割をこなし

ているのか」

「そうでもしないとこの試合、女バスに勝利を引き込むなんて、到底無理だからな」

仁王立ちで腕を組み、コート上を駆け回るメンバーを見ながら俺は言う。

「勝つための作戦……。あの子達の可能性をここで終わらせない為の、勝ちに行くための嘘」

椅子に座り、両膝に両肘を置き、握った手に額を当て苦々しく続けるスバル。本当ならゆっくり愛莉ことを成長させたかったんだろうな。こんな不意打ち的な事じゃなく、もっと正面かちゃんと。

「そつかじゃあ、嘘がバレればお終いか。……。愛莉が本当に前向きになれたって訳じゃないんだ……」

本当に残念そうな表情で肩を落とす美星さん。その姿に教師としての美星さんの姿が見られた気がする。

それでも、今回の試合で色々と自信になったりしたら良い方向に向くんじゃないかな。自分の持つ可能性を知れたら、新しい世界に入る感覚を知ればきっと大丈夫だと思うんだけど……。まあそれもこの試合次第……か。

俺たちが話していた間にも試合は進む。気付けば女バスの得点は愛莉一人で八点を叩き出していた。対して男バスは一ゴール返したところで、タイムアウトを取った。

男子2 - 8 女子

「よし、愛莉、みんな。よく頑張ってくれた。この調子でいけば勝てるはずだ！このまま油断せず、試合を続けよう！」

女バスの元気のいい返事と共に、スバルが細かい指示をみんなに与えていく。まあ内容を聞けば指示というより確認だな。多分このタイムアウト明けに来る、男バスの行動に当たりをつけているんだろう。

少し息の上がつっているメンバーには関係なく、無機質なブザー音が体育館に響く。

「さあ、みんな頑張つてこい！」

スバルの掛け声でメンバー達がコートに散っていく。

さあスバル…。お前の演出通り動いてくれるかな？

男バスのゴール下。そこからボールがコートに入り、試合は再開される。

男バスは竹中夏陽を中心一本取りに来る。速攻は使わず、スロースペースで攻め上がってくるところを見ると、それ程点差は気にしてないらしい。それよりも自分たちのペースを取り戻させる事が先決と考えているみたいだ。意外と冷静に対処してきやがるな、カマキリさん。

女バスのデイフェンスはザルだから、男バスに簡単にパスで切り崩されて点を取られてしまう。…まあそこには俺もスバルも期待してないからどうでもいいか。

それよりもだ、問題は愛莉だ。やっぱり対策を打ってきた。っていうか、逆に何もしなかったら、カマキリさん監督失格だけだな。でも三人がかりは予定外だわ。ま、その分こっちの策の成功率が上がるから儲けもんだな。

お！カマキリさん。したり顔ですね。じゃあその顔潰してあげましょう。ね、スバル。

スバルに視線をやれば、こっちの考えが分かっているみたいでニヤツと笑って首肯しやがった。ククツ…さあやろう。カマキリさんがどんな反応するか楽しみだな。

決断した後のスバルの行動は早かった。椅子から立ち上がると、「真帆！」叫ぶ。真帆の方も「待ちわびた！」と、気合い十分でボールが渡った瞬間、シュート放っていた。投げられたボールはそのままゴールに吸い込まれるように落ちていく。

「んな！」

ハハ…。その顔が見たかったんだよカマキリさん！

「三沢にもマークに行け！あのシュートは偶然なんかじゃない！」

アハハツ！面白いくらい予定通りだなスバル！ホントお前は恐ろしいよ。流石桐原中の知将だ！

三沢にもマークが行ったところで、今度は紗季にシュートを打たせる。これも真帆同様に、なんの不安も無くゴールに吸い込まれていく。

その状況に今度は声も出なくなっている。ほんとに愉快だ。智花には最初から二人をつけて警戒し、試合直後の愛莉のプレーを見て、愛莉にも二人。残る一人で紗季と真帆を抑えとなると大変だよな、カマキリさん！ひなたは仕方ないとしても、油断していると何をされるかわからないと勝手に考えてくれると助かるんだけどな。

そのまま前半は女バスペースで終わりを迎えた。

男バス10 - 16 女バス

「にはははは！みんなスゲーじゃん！」

「おうよみーたん！もしかしてあたし、シュート天才じゃね？」

「はいはい。真帆調子に乗っていると、後半に痛い目見るわよ」

美星さんに、紗季、真帆。女バスの健闘にそれぞれが賞賛し、明るい雰囲気を作り上げていた。

確かに良い雰囲気の後半もやれるかもしれない。けど…。

スバルを見れば、メンバーにねぎらいの声をかけているものの、その表情は硬い。あの子達には気付かれないかもしれないが、それでも硬さの見える表情をしている。そこから察するに、多分俺と同じ結論なんだろうな。

「さあみんな。ちゃんと水分とって、後半も動けるようにしないと！息もちゃんと整えよう」

俺はスバルの不安点を少しでも解消しようと、メンバーに声をか

ける。

「足に不安があつたら言つて！ちゃんと動けるようにマツサージするから」

「おゝみさちゃん。ひなたたちよつと足がプルプルするー」

「じゃあひなたちゃんそこ座つて。すぐにマツサージするから」

俺はひなたを座らせマツサージを始める。触つてみてすぐに分かつた。少し痙攣している。元々体力に不安のあるひなた。最後まで走りきれることですら不安があつたが、その前兆がもう出ていたか！。

「どう？ひなたちゃん。プルプル落ち着いてきた？」

「みさちゃんすごい。ひなたのあしのプルプル。なくなったよ」

よかつた。まだ初期な感じだったから、簡単なマツサージで落ち着いたみたいだ。

「よし！ひなたちゃん。後半もさつきと同じ調子でお願いね！」

「おー！ひな頑張る！」

これで少しはマシになったはず。さあスバルみんなに何か言つてやれ。ここからは半分精神論みたいなもんだし。ほら、真帆なんかも不安になつて聞いてきてるじゃないか。少しでも不安要素を取り除いてさ、あの子たちを送り出してやるうよ。

でも俺の思いはスバルには届かない。スバルは硬い表情のまま何も言えず、何か言おうとしたところでハーフタイム終了を告げるブザーが鳴つた。

やはり試合再開直後から、俺とスバルの不安要素が目に見えて表れた。

スタミナの枯渇。

こればかりは一週間ではどうにもならなかつた。技術は付け焼刃でもなんとか出来る。でも、スタミナだけはどうにもできない。こればかりは普段からの努力の積み重ねだからな…。

特別ルールで試合時間が短くなつてるとはいえ、やっぱり最後まで持ちそうにない。智花以外の動きが、前半に比べれば極端に落ちている。

仕方ない。こればかりはどうしようもないか。点差も徐々にはあるけど確実に追いついてきている…。ここは一度流れを切るべきだ！

「スバルこのままじゃジリ貧だ。俺はここで一度切るべきだと思う」「ああわかつてる。悪いけどタイムアウトを貰ってくれ」

「了解。その間にカード切るか決断しといてくれよ」

「大丈夫…。もう決めてるから」

その言葉を聞いて安心した。やっぱり試合になるとスバルの甘さは消える。とりあえずオフイシャルズテーブルにいる、スコアラーにタイムアウトの要請に行かないと。

「智花！」

スバルも限界と感じていたらしく、もう一段階先に策を進めるか。時間的にはこの辺りがギリギリだろうし。

「ここからはシュートはいいから…。時間を目一杯つかって攻撃をするんだ。ギリギリまでシュートはするなよ」

「でも！それじゃ！」

「智花」

「……はい」

まあ智花の気持ちは分らないでもないけど。今自分に出来ること、チームの事を考えれば、智花にワンマンアーミーやらせた方が手っ取り早いのは間違いないし。でもそれじゃ、それだけじゃ勝ちに結び付かないんだよ…智花。

「愛莉も無理して攻めに回らなくて良いから。これ以上男バスに点を取られないよう、守備を中心に動いてくれ」

「…は、はひ」

酸素ボンベで呼吸を整えながら、絶え絶えな声で返事をくれる。

思ったよりも体力を削られているみたいだ。まあ実際はダブルチームが愛莉のストレスになって、無駄にスタミナを削られているんだろうけど。

気休め程度の回復アイテムで、全快値になることは無駄かもしれない。タイムアウトの終わりを告げるブザーも鳴った。

「さあ、あと少し頑張るんだ！そしたら次に繋げられる！」

スバルがそう五人を勇気づけてコートに送り出したものの、あつという間に同点にされ、いとも簡単に点差をつけられてしまう。あの子達にはとても酷な事だろう。このまま行くと心が折れて、虐殺的な惨状がコートの中に広がるかもしれない。一人気を吐いて耐える智花の姿がとても痛々しく見えてくるのも仕方ないことかもしれない。

でも、ここら辺りが我慢の限界じゃないか？時間稼ぎもうまく機能せず、むやみやたらに点を稼がれるくらいなら、ここは智花の力を使うしかない。残り時間は三分を切るぞスバル！いくらなんでもこれ以上引き延ばすなんてことは無理があるだろ！

「おいスバ　！」

今のコート上の状態に耐えきれなくなった俺が、スバルに声をかけようとしたその時だった。愛莉がもぎ取ったボールを真帆へ。真帆から智花に渡った瞬間、智花の独り舞台は幕を開けた！

三点シュートかと思わずような位置でシュートを打つと、綺麗な軌道を描きボールはゴールへと吸い込まれた。そこからは疾風怒涛の勢いで智花が男バスゴールを攻め立てる！動揺しい男バス部員からボールを盗み取り、男バスがミスしたシュートを奪い取り、それらを全て女バスの得点に変えていく。

途中、敵エースの竹中にボールが渡り、一瞬流れが変わりそうな雰囲気になったが、ひなたのミスマッチのディフェンスに翻弄されてくれた竹中が、この時間帯での痛恨のファールを犯してくれた。もちろんこの機会も流す訳が無く、きつちりと女バスの得点に積み重ねられた。

男バス26 - 24女バス

残り時間はもうほとんど残っていない。その中でも智花は一人で男バスを攻め立てる！もちろん男バスもそれに応じ、もうノーガードで殴り合っただけに倒れた方が負けになるようなチキンレース状態だ。その状態で、男バスのメンバーの一人がこの状況に焦れてしまったか、智花の事を無理に止めに行きファールになった。もちろん智花はきっちり沈める。

男子30 - 31女子

男子ボールでリスタートされるが、ガス欠となった智花に、ほとんど動くことのできない女バスメンバー…。ボールを持った、敵エースの竹中を止める術はなく、苦心して奪ったリードさえ簡単に手放してしまった。

これで残り時間は二十五秒。希望の光さえ消えてしまいそうな時間。最終ターン女バスの物に出来たが、男バスにリードを許してしまっているこの状況。この攻撃を失敗すれば、自身がやってきたことを全て否定されてしまうのと同意かもしれない。

でも、あきらめなければ！

疲弊しきつた体を引きずり、なんとか敵陣までボールを運ぶ智花だが、そこに無情の三人掛かりでのディフェンスが先を立ち塞ぎ、俺達のエースを完膚無きまでに殻の中に押し込めてしまう。

「俺達の…男バスの勝ちだ！湊ッ！」

殻に押し込められた疲労困憊のエースに、もはや殻を打ち破る力なんて残されている訳がない。それでも、それでも。

「私が…。私が負けるなんて些細なこと！だって今はみんなと一緒に！私は…私は一人なんかじゃない！」

殻をこじ開けようと無理矢理突破を試みようとする智花。それを

見て単独突破を図り、自らがゴールを叩き込むと思ったディフェンス陣は、智花につられて囲いを狭めようと動いた。

周囲を確認できないほどに視界を潰されてしまったのに、それでも智花の中には確信できるモノがあった。智花はそれに従いパスを出した。完全に虚を突かれた男バスは、それが何を意味するか分らず、一歩行動が遅れた。

智花が出したパスの先には真帆がいて、ボールを受け取った瞬間、真帆は「任された！」と叫び、覚えてたのワンハンドシュートを放った。まだまだぎこちないシュートだったが、そのシュートには確かに智花の思いが乗り、真帆の不安な部分を支えるようにボールを運び、ゴールのネットを奇麗に通ら過ぎた。

同時に審判がこの試合を終える笛を鳴らし、俺達のベンチは歓喜を迎えた。

第一試合 第四ペリオド（後書き）

誤字・脱字報告お待ちしております。よろしく願います。

終 ロッカールーム

あの試合から数日が過ぎた。

その間の変化として、まずスバルは七芝高校から別の高校へ編入することは止めた事を決めたらしい。とりあえず一年間は我慢して過ごすらしい。

それでだ。何やら七芝高校内でバスケの同好会を作り、そこを活動の拠点とするらしいが…これがなかなか難航中らしい。つたく。それよりも俺との約束の方が優先されるべきじゃないか？普通は。

次に俺。とりあえず誕生日が過ぎた事から、移動に何かと便利な原付の免許を取りに行くことにした。まあなんとか…いやきつと辛うじてだと思うが、無事に免許を取得する事ができ、自転車以外の移動手段を手に入れる事が出来た。

これで地味に遠い長谷川家へ楽に行けるようになった。毎度自転車で片道四十五分というイジメから解放される。ちなみに原付も購入した。色々と悩む事があったが燃費の良さを考えると、カブちゃん以外考える事が出来なかった。決して北海道出身の俳優に感化された訳ではない…きつと…いや、多分。ちよつと自信無いかも。

最後に慧心学園女子バスケットボール部。とりあえず今回の試合で、練習場所と時間については確保できるようになったらしい。それは正直良かったと思うが、結局スバルがコーチを辞めてしまった為、バスケをすっかり教えてくれる人間がいなくなり、以前と同じような感じになってるらしい。それでも、スバルが残した練習メニューを基にして、部員それぞれが頑張っている、と美星さん情報だ。このまましっかりと成長してくれることを祈るばかりだ。

さて、蛇足ではありますが、俺は新しく手に入れたニューウエポンを駆り、長谷川宅に向かっている最中だ。この間、偶々スバルに用があったことを思い出し、バイト明けに長谷川宅に向かったとこ

る、面白いものを見つけてしまった訳である。

それが何かと言えば、

「昴さん！今日もよろしくお願いします！」

お！どうやら間に合っただらしい。

「サキおはよ。またバイト明けできたのか？」

「おはよスバル。智花。そうだよ、俺も最近これ見るのが楽しみでさ」

俺が毎朝と言って言い程長谷川宅に何を見に来ていたのかといえば、スバルの慧心学園女子バスケット部のコーチの就任を賭けて、フリースロー連続五十本を智花が決められる事ができるか？が行われるからである。ちなみに期限は無いが、一日一回のチャンスのみになっている。

「ホントよくやるよな、サキは」

「それお前が言うか？」

アハハなんて笑い合うが、完全にほっとかれた智花は少し拗ねてしまったようで、

「おはようございます未咲さん。それじゃ始めますから二人で見て下さい！」

プリプリとしながらゴールの方に向かって行ってしまった。

「あちゃー怒らせちゃったか。ほらスバル、お嬢様のご機嫌を回復させるために何か言って」

「なんで俺が　　はあ。智花、今日はやれそう？」

「はい、なんだか誰かのお陰かいける気がします！」

「はは、そう？でもそれ昨日も聞いたよ」

「だ、だ、大丈夫です！」

「そっか頑張ってるね」

「はい！」

元気よく答える智花を見て思う。今日こそ決まるといいなと…。そしてこの馬鹿を、あの場にいるみんなの元へと連れて行ってやってくれ…と。

終 ロックールーム（後書き）

これで原作一巻分の話は終了です。次は原作二巻分の話になると思
います。

次回の更新は少し間が空くと思いますが、のんびりと待つていただ
けると嬉しいです。

また、誤字報告をしていただきありがとうございます。
引き続き間違いがあればご連絡いただくと嬉しいです。

では、次回更新までしばらくの間失礼します。

序 ベンチ前（前書き）

予定よりも時間がかかってしまいましたけど、ようやく次話投下です。

遅くなったホント。

そういえば、この間原作の4巻まで読み終えたんですが、4巻でまさかのポイントフォワードについて載ってて、メチャ焦りました。原作ではあんな扱いですが、今作では現状維持のまま行きたいと思いません。

それでは、本文お楽しみ下さい。

序 ベンチ前

スバルがコーチを務めた僅かな期間はとうに過ぎ去り、俺とスバルの二人ともが慧心学園女子バスケットボール部との縁が切れてしまった様な感覚が湧き上がる。

それでも必死にその事実を覆そうと一人頑張る少女がいる。

彼女の頑張りは、きつとスバルにとっていい方に流れてくれるんじゃないかという期待を持ちながら、俺は連休でくそ忙しいバイトをせつせとこなしては、二人の賭けが成立するかを楽しみに、ついでに言えば、なゆさんの作る朝食を頂きに毎朝スバルの家へと足を運んでいた。

智花の連続シユート五十本連続成功。これがスバルと智花の間で交わされた賭け。期限は特に決めていない。

でもその賭けの期間は終わってしまった。その結果はスバルの負け。むしろスバル自身そうなることを望んでいた節があるけど……。

俺はそんな事を思い出しながら、少し遅れた連休を楽しむ為、平日の真昼の街中をぶらついていていた時のこと。いつもぶらつく駅前や商店街の方ではなく、何故か何かに誘われるようにいつもとは違う所を歩く。

駅前や商店街から少し外れた所にで、とある一店の前で足が止まった。その店の外観は普通の喫茶店のようにも見える。けど奥の方にはコートのようなものが見えた気がする。

俺は誘われるように店内へと足を踏み入れていた。そこには、やはりバスケのコートが半面。中では三対三のゲームが行われている。

「いらっしやい」

横から声をかけられて、そちらを向けばパリッとしたシャツと黒いパンツで決めている、結構若そうな店の人が立っていた。

「飲食店に入っただけ立ちっぱなしってのもアレだろ。どっか座らない？」

「あ、すみません」

近くにあったカウンターに腰を下ろすと、俺は再びコートの方を見やった。

「どう？やっぱ珍しいだろ？」

「どうぞ。なんて言ってお冷を置いてくれる。」

「アレはね、うちの自慢なんだよ」

「確かに凄いですね。あれどうなってるんですか？」

「アレかい？アレはちよつと頑張ったんだよ。ここのテナントを借りる時、不動産屋に無理言っつてさ、このビルの三階部分まで買い取つて天井ぶち抜いたんだよ」

…はは、確かにそりゃ無茶言ってるよ。世の中の事なんてそんな分かつてる訳じゃないけど、それ自体がどれだけ無茶な事か理解できさる。

「ここつて、街中にあるとはいえ、駅前やその周辺の繁華街からは外れてるだろ」

「そうですね」

「そのお陰でここを手に入れる事が出来ただけだね」

快活に笑う店員さん…いや多分店長さんだろうな。正直ここまでやるうと思うなんて信じられないところはあるけど、

「俺はねスポーツを生で見るのが好きなんだ。その為ならさ、どれだけ時間とお金がかかってもいいからと思っつてさ。だからこんな店を作ったんだ」

この言葉を聞くと、この人がどれだけ本気かというのがわかる。

そしてその気持ちは俺も同意できる。

「あの、あそこでやってる人達って？」

「あの人たちかい？一応ここは見ての通り喫茶店…というよりはスポーツバー&カフェなんて考えてくれたらわかりやすいかな？」

それであそこで今やってる子達は、偶々ここを見つけて来たみたいなんだけど…そこそこやるだろ？一応あのコートは見ての通りバスケの他にも、スカッシュやバドミントン。卓球なんかもできるよう

にしているんだ。

まあちよつと広めの多目的ホールなんて思ってくれたらいいよ。ちなみに空いてたら貸出金は応相談ってところかな。

それと、ちよつとしたイベントなんかもやってるから興味あったらやってみない？」

そうなんですかなんて答えながら、俺の視線はコートの方に釘付けになっていた。正直こんないい場所を見つけれなんて思っていなかった。ここなら、スバルと一緒に面白い事がやれるかもしれない。

「ところでさ。ずっと見てばかりじゃなくて、なんか頼んでくれないかな？ じゃないと商売あがったりなんだ」

第二試合 第一ピリオド（前書き）

今回は原作の2巻分の話になっています。

無理のないようにはなってるはずですが…

誤字・脱字などあればご連絡をお願いします。

第二試合 第一ピリオド

智花との賭け終了後、少しスバルの家への足が遠のいてしまうのかなと思っていた。けど実際はというと、

「わー。この白和え美味しいですね甘すぎないのに、お豆腐の味もしっかり合って、本当に美味しいです」

「そう？ありがとう智花ちゃん。でも渋いとこいくわね」

「おねーちゃん！すじこ！すじこもつとないの？」

「もうみほしちゃんったら！そんなに塩辛いものばかり食べてたらだめよ！お野菜もたべなさいな。……もう切り分けてくるからちょっと待ってて」

「あ、なゆさん俺も欲しいんで取りに行っていていいですか？後味噌汁おかわりです」

「あらあら、さきちゃんも？さきちゃんはお野菜食べてるからいいけど、だけど食べすぎはだめよ」

「うい。了解っす、なゆさん」

以前と変わらず、みんなで朝食の食卓を囲んでいる訳ですよ。その中で一人しかめつ面をしてこちらを見る男が一人…それはまごうことなく、この家の一人息子である長谷川昴その人だ。何故かこちらの方を見て、まるで物の化でも見るかのように突っ立っている。

「あの…昴さん。どうかなさいました？」

そのスバルの様子が不思議に思ったのか、智花のやつが声をかけた。

「あーいや。なんていうかさ。二人とも来てたんだなって思って」

まあ…そりゃな。そんな気がしたわ。苦笑しているスバルに思わず同意してしまう。

「ふえ？あの…その…」

スバルの言葉に反応してワタワタキョロキョロする智花。なんか怯えてるような戸惑ってるような…まあ大方みほしちゃんに連れ回

されてんだらうけど。

「 黒幕はアンタか」

当然スバルもそれは分かっている訳よね。

「 黒幕？何のことかな？」

「しらばつくれるなよ。ミホ姉が智花に毎朝来ていいぞ、なんて事
いったんだろ。サキは…あれ？何で来てんだ？」

あはは…でつすよね〜。

「まあいいじゃん俺は。まあ気分ですよ。それに毎日来てないだ
ろ」

「そうそう。みさきは毎朝じゃねーじゃん。智花の方は私が智花に
言ったのもあるけどさ、昴、おまえが智花にいつでも来て良いつて
言ったんじゃないか。だから私は智花に昴はお前が来る事をいつでも
歓迎しているぞって、そう伝えただけだぞ。なんかまずい事でもあ
るか？」

みほしちゃん。しれっと凄い事言ってるような気がするんだけど
…。その横では、さっきの顔から一段と不安の色が濃い顔色へと変
化している。

「なー昴。お前、これ以上、智花に、ここに、来て欲しくなかった
の？」

なんかみほしちゃんの顔が、ものすごく悪い顔になってる。け
ど智花には見えない位置でやってるし、やっぱみほしちゃんタチ悪
いっていうスバルの気持ち分かるわ〜。きつとみほしちゃんと付
き合う人は大変なんだろうな〜、なんて思っていたら、

「いや！そんなことは決していない！むしろ毎日、毎朝だけでも、一
緒にご飯食べたりバスケットしたり、そんな事が出来れば、これ以上な
い幸せでございます。不肖ながらこの長谷川昴と、サキの二人で務
めさせていただきます！」

スバルの言葉に思わず口に含んでいた味噌汁を吹いてしまった。

「ちよ！スバル！お前、何、俺の事、思いつきり巻き込んでんだ！」
俺は咳きこみながらスバルに反論する。

「ふえ！未咲さん来てくれないんですか？」

お、おーい。ちよいちよい智花さんや、なんですかその援護射撃は？それは一体何についての事でしょうか？

「いや…俺は、アレだよ。流石に毎朝は無理だからさ、週に二・三回くらいで納得してくれない？後はスバルに好きに使ってくれていいからさ」

「ふえ！え〜っ！そんな昴さんを好きに使ってっ〜！」

あれ？智花の奴なんか勘違いしている気がするけど…まあ、その辺はどうでもいいか。それよりもだ、

「なに俺の事盛大に巻き込んでくれちゃってんの！」

スバルの隣に行き、囁くように声をかけついでに横腹をつねっておく。

「痛ッ！何してんだ！あと近寄んな、その味噌汁を何とかしろ！」

「うつせー！それよりお前はあつちを何とかしとけ！」

俺はスバルに言う事だけ言ってその場を離れ、

「なゆさん。すんませんタオルもらえます？あと袋あったら下さい」

「あらあら。はい、タオルね。その服そのまま洗濯かごの中に入れてね。洗っておくから。そうそう、着替えはすばるくんのシャツね。みさきちゃんがそうだったのは、すばるくんのせいだし」

「え！いいんですか？重ね重ねすんません。じゃ遠慮せず甘えさせてもらいます」

「はい。そうしてね」

「あ、あと、ちゃん付けは勘弁して下さい」

「そう？可愛いのに」

「いやマジで止めて」

なゆさん何でそこで何も言わずにニコニコと笑っただけなんですか？そこはちゃんと答えて欲しいですよ。

流石に見知った人たちとは言え、女性が三人。この場で服を脱ぐ訳にはいかないと思い、汚してしまった味噌汁の入っていた食器は

片付け、リビングを出て行く。

後ろの方で、なんか智花とスバルがどこのカップルだ！と言いたくなるよな会話が…。まあ内容はバスケの事についてだから、全然色っぽくないんだけどね……。とりあえずさっさと着替えに行くべ。

俺が着替えて戻った頃には、みほしちゃんと智花、スバルの三人は既に学校に向かった後。残されたなゆさんが一人朝食の片付けをしていた。俺も片付けを手伝うべく、茶碗に残っていた御飯を美味しくやつつける。

「なゆさんこれで最後です。あと着替えやら洗濯やらすみません」

「みさきちゃんいいのよ。気にしない」

「うい。ありがとうございます」

「いいえ。あ、そうだみさきちゃん」

「なんすか？」

「さっきね智花ちゃんすばるくんね、『また放課後』って言ったの」

「…え？それって」

「そう。すばるくん今日から智花ちゃんたちを教えに行くみたいなの。だから、みさきちゃんも今日行けるだったら、わたしは行って欲しいなって」

「そっか。今日からなんだな…」

今日からスバルコーチが復活する。なゆさんはスバル一人でも大丈夫だと信じてるんだろうけど、なんか不安なところがあるのかな？だから俺にこんなこと言うのかな？なんて思うけど、そんなの関係なく俺自身もあいつらに何かしてやりたい気持ちはがある。だから当然答えは決まってる。

「今日はバイトが無いから大丈夫です。俺も行きますよ、慧心に」
俺の声を聞いたなゆさんはとてもいい笑顔をして、

「じゃあ、またお化粧と着替えをしないとね！うん、楽しみだわ」

あ、あああああ……………、なゆさんだからそんなに勧めてきたん

ですね。そんなにも前回の事で何かの味をしめてしまったのですね。ハハ…ハハハ…。くそっ、仕方ないよね、こうなったら毒を食らわばなんとやらですよね。」「わかりました。いったん家に帰ってから、また来ます。三時からいいですよね?」「はい!任せといてね」「…あい」

力無く俺はそう答える。

ペペペペとなるエンジン音がなんか物悲しさを歌ってるような気がした家路になった。

【宛先：スバル

件名：今日の事

学校終わったら慧心に行くんだって?なゆさんから聞いたぞ。つか、それならそれでお前が教えてくれてもいいんじゃないやね?除け者感凄いんだけど。まあそんなことどうでもいいか。

俺もあいつらに会って〜からな。一緒に行つていいか?俺原付で行くし直慧心に向かうけど何時くらいにいたらいい?それに合わせてこつち動くから。

あ、俺今から寝るから返信ないと思うけど、気にしないでな。んじや、連絡待つてる】

【差出人：スバル

件名：RE今日の事

こつちから連絡しようと思ってたんだけど先越されたな。あと除け者にしてないからな!絶対!

俺、授業終わったてからだから、多分四時とかそのくらいになると思う。また学校出たら何時くらいに着くかメールする。それじゃあまた夕方な!】

第二試合 第二ピリオド

うう…、うあ…。何時？

寝ぼけた頭で近くを探って、携帯を手に取る。んで、時間を見る。十四時二十分…帰ってきたのが九時くらい…。風呂入って寝たのが十時前くらいだから…。四時間くらい寝たのか？ああ…気持ち悪い。もっかい寝なおす…ってそんなことしたらぜってー起きれない。とりあえずシャワー行こ。

俺は起きたばかりで動きの悪い体を引きずって風呂場に向かう。なんとか風呂場に辿り着き熱いシャワーをかぶる。そのお陰で鈍っていた思考が徐々に覚醒していく。

シャワーを浴びてすっきりした頭。とりあえず飯がたべたい。体がそう欲したのでキッチンに行って冷蔵庫を見るけど、

「なんも無い」

すっかり買い出しを忘れてた。

どうしよう？どっかで飯食うか？それとも…。

「まあいいか。どうせ遊ばれるんだから、なゆさんに何か貰おう」
そう決めて俺はさっさと着替えると、自慢のマシンに乗って長谷川宅に向かった。

「いらっしや〜い、みさきちゃん待ってたわ〜」

「うい、なゆさんお邪魔します」

「さ〜て今日はどんなのにしましょうか」

「どんなのって…なゆさんなに着せる気ですか。一応小学校に行くんだから、前回と同じでスーツでいいですよ」

「えー！そんな勿体ない！もつといろんな服を着るべきよ！」

「いやいや、そんな力説されても…。そうだスーツもできるならパンスのやつがいいんですけど」

「それはダメ！みさきちゃんなら絶対にスカートよ！本当なら生足

でもいいんだけど、ストッキングは重要よね」

「あはは…そうすか。そうなんすね」

なんかこれに関して色々諦めた方がいいのかもしれない。

「あのなゆさん。盛り上がってるところ悪いんですけど、なんか食べるものありますか？」

「あら？みさきちゃん食べてないの？」

もう開き直った方がいいかもしれないなんて思い持ちながら、それよりも食欲の方が勝ってしまう自分に現金だなと思う。ともかく腹が減っていてはなにか考えようとする気も起きない。

「そうなんです。すっかり食材を買うのを忘れちゃって…。だからなんも食えてなくて…」

「あらあらそうなの。一応お昼に作りすぎちゃったサンドイッチがあるから、それ食べる？」

「ありがとうございます。多分どっかで食べてからくると間に合わなくなるかなっと思っただんで」

「そうなの。じゃあ今出してくるから、それ食べちゃったらやっちゃいましょう。じゃあ先に着替えておいてね」

ルンルンといった様子で鼻歌を交えながらキッチンに向かうゆなさん。それを見ている分にはとても楽しそうだからいいけど…それが女装させる事っていうのはどうなんだろう？しかも犠牲になるの俺。でもこうやって飯を貰ってること考えたら、ちようどいい交換条件なのか？いや、なんか俺の方が分が悪いような…。よそう、考えるだけ悪い方にしかいかないわ。

とりあえず俺は用意されていた女性用のスーツを着込む、なゆさんが持ってきてくれたサンドイッチをつまむ。はあ…毎回こうなるのかと考えると、少し重い気持ちになった。

スバルからメールが来たのは準備も整い、なゆさんに挨拶して慧心に向かおうとした時だった。予定通りの時間に着くという事らし

いので、俺もそれに合わせて慧心に向かった。

どうやらスバルより先に着いたらしく、校門のところにいる守衛さんに事情を話し、原付の置く場所確認して、愛車を指定場所に置いてくることにした。戻ってみてもまだスバルは来ていなかったの
で、守衛さんに事情を話し、しばらくその場で待たせてもらう事にした訳だが…。

「遅い」

「ですね」

「時間に遅れる男ってどう思います？」

「割と多いと思いますけど、どう言い訳したところで最低だと思
いますよ」

「ですよー」

なんて会話を繰り返している訳です。現在の時間は四時は既に回
っていて長針二を示している。つまり自分で言った時間を十分程過
ぎている。

「守衛さん」

「はいはい」

「ひとつお願いしていいです？」

「なんなりと」

「私の待ち人が来たら、一緒にサイテーって言って貰っていいです
か？」

「もちろん。しっかりお手伝いしますよ」

「ありがとうございます」

にこりと微笑みかけながら協力を感謝すると、

「いえいえ。こんな事はたまにしかできないですから」

なんて良い笑顔で答えてくれた。短い時間しか話していないけど、
この守衛さん本当にノリがいいと思う。

「サキッ！ごめん！遅れた！」

近くのバス停から走ってきたのだろう。少し息を切らせたスバル
の姿が見えた。その姿を確認すると、俺と守衛さんは目を合わせ二

ヤツと笑う。

「すまん、待ったか？」

スバルのそんな言葉は無視して、俺と守衛さんは指をさし高らかに言い放つ。

「女性を待たせるなんてサイテー！！」

「うえっ！ええー！！」

ほんとにノリがいい守衛さんだ。ビシッと決めポーズまでして俺に合わせてくれたよ。マジ感謝だわ。スバルの方は、ワタワタしてパニック状態みたいだけど。

「え！んな、つて、サキ！だつてお前！」

「言い訳した所で無駄です。私を待たせたことは事実なんだから！そしてそれを証言してくれる人もここに」

「はいはい。確かにこのお嬢様は、どこの馬の骨か分らない無粋な男性を、寛大な心にてこの場でお待ちしておりましたよ」

わざわざ大仰な言い方で喋る守衛さんに、スバルは二の句が継がない程の大口を開けて固まってしまった。まあいじめるのはこの程度で抑えておこう。じゃないと体育館で待っているはずの智花達に悪いしな。

「守衛さん。ありがとうございました。こんな茶番にまで付き合ってもらえて」

「いえいえ。いいストレスの発散になりました。お二人ともこれから女子バスケット部のコートに行かれるのでしょうか？これから何度も顔を合わせる事になると思います。これからもよろしくお願いします」

「いえいえ、そんなご丁寧にしてもらわずとも、もっとフランクな方が気が楽です」

「そうですか？でも、最低限の体裁がありますんで、このくらいで勘弁して下さい」

「あはは、こつちこそ無理言ってるみたいですね。これからよろしくお願いします」

「はい。それではお二人ともこの入校証を持って行って下さい」

「ありがとうございます。それではまた帰る時に立ち寄って返却します」

「わかりました、ではどうぞ中へ」

勝手に二人で話を進め、完全に蚊帳の外に追い出され、話についてこれていないスバルの尻をつねりあげた。なんか悲鳴みたいなものが聞こえたような気がするが関係ない。そのままスバルを引きずり、あの子達が待っている体育館に向かった。

この扉の前に来たのは本当に久しぶりだ。最後に来たのは間違いなくあの試合の時だ。あれから数週間が経った。彼女たちはどれくらい上達したのだろうか？俺が直接指導したのなんてほんの数回程度。もしかしたら彼女たちに忘れられているかもしれないな。

そんな不安と期待。両方が入り混じった不思議な感覚が体を巡るふと、隣にいるスバルをみれば、俺と同様に感慨深げな表情をして立ちすくんでいた。

「なあスバル」

「ん？」

「一応お前がヘッドコーチなんだし、この扉お前が開けたら？」

そう。俺なんかよりもあの子達と付き合いの長いお前が開けるべきだ。

「 わかった」

何かを察してくれたのか、スバルが体育館の扉に手をかけてくれた。

「サキ…開けるよ」

俺は首肯だけ。それを確認したスバルは一気に体育館の扉を開け放った！

『おかえりなさい！あなた！』

バタンツ！おおきな鉄の扉が閉ざされる音が響いた。

「…夢か」

「…現実かな？」

俺の問いに疑問で返すスバル。つまり答えはない。

「開ける？」

「俺が？」

今度はスバルの問いを疑問で返す俺。…答えはないが、スバルの目には任せたという意思が見えた。そっか、じゃあ仕方ない。

今度は俺が手を掛け、閉ざされた扉を開け放つ！

『おかえりなさい！おねえさま！』

バタンツ！再びおおきな鉄の扉が閉ざされる音が響いた。

「…なんか怖気が走った」

「…そっか」

なぜか俺の感想に、スバルが納得してくれた。きつと似た思いをさつきしたのかも知れない。

「なあ」

「なに」

「同時に開けない？」

「…ああ」

俺たちは、「せーの！」と声を掛け、今度はゆっくりと扉を開けた。

『おかえりなさいませ』

やはりこれは夢ではなく現実だったらしい。三度目ともなると、閉めるのを阻止しようと、真帆と紗季が扉を抑え、ひなたと智花が俺達を取り押さえ、愛莉が逃走ルートを断つという、なかなか高度なチームワークを見せて、俺たちを中に引きずり込んだ。つまりはだ……うえるかむかおすらんどへ。いやな予感しかしない空間に招待？されたしまった。

強制的に連行される俺とスバルは、智花とひなたに引き連れられ、あらかじめ用意してあった席に通されると、

「あなた、おねえさま、おひさしぶり。おらポッキー食べ！」

「おにーちゃんイチゴ味もあるよ」

「ひな！違っただろ！今だけは『あなた』と『おねえさま』だろ」

「おー。そうだった」

さすががおすらんど。何をどこから突っ込んでいいやら皆目見当がつかない。仕方ないここは……全てスバルに丸投げ使用。俺はスバルにその意思を告げるアイコンタクトをスバルに送った。スバルもそれを察してくれたようで、苦笑しながらだが納得してくれる。

「……ねえ、聞いていい？」

「はい、なんでしよう？」

「これは一体何なの！？その常軌を逸している姿はなに！？あとその呼び方もなんなのさ！？」

おお！なんとという畳みこみかける突っ込みだ！さすが知将・闘将と呼ばれるだけの事はある！

とりあえず確認しよう。彼女たち五人は、慧心学園初等部六年生の女子バスケットボール部員だ。普段は大人しいがバスケットとなると一部見境がなくなる湊智花。笑っていることが多く、快活な姿がとても印象的なお嬢様？の三沢真帆。いつも冷静なのに時より何かがおかしくなる永塚紗季。小学生の体形にはとても思えない長軀、でもそれがコンプレックスになっている香椎愛莉。最後にみんなの愛玩キャラクター袴田ひなた。

この五人で構成される慧心学園女子バスケットボール部なのだが、目の前にいるその子達が、何故か学校指定の物と思われる紺のスクール水着にエプロンなんていうかなり斬新な出で立ちでいる訳だ。そしてあの言葉。「あなた」だの「おねえさま」だの、それでいて普通に用意してあるお菓子を貪っているこの状況。まさにかおすわーるど。

「いろいろ長谷川さんの事について、話を聞いたり観察して、その結果！長谷川さんの好みはこの辺りだろうって判断したんです。きつとメイド服なんかよりも家庭的な感じがお好きですよね？」

……。

「って！水着エプロンのどこが家庭的なのさ！」

同意である。一体何をどうすればその答えが導きだされるのやら…。小学生とは恐ろしいものなんだな。

なんか双方の言い合いが続いているけど…もういいよ。早く終わらせてくれ…。俺もこの格好で居続けるのしんどいし。早く始めようよ。練習をさ…。

「お願いです。早く着替えて来て下さい」

俺の願いが通じたのか、ようやく疲れた声でスバルが少女達に指示を出した。これでようやく始められるのか…はあ…始める前から疲れた。

「…球技？」

「大会…？」

「おう！ぜってー勝ちてーから。負けられねーんだ！あの6-Dの連中には！あ！でも、あの服を自信満々に選んでたのは、あたしじゃなくてサキだからな！」

「く…なにが…何がいけなかったの……」

運動着に着替えた五人から、なんであんな恰好をしていたのか？という疑問を投げつけてみれば、そんな答えが返ってきた。

とりあえず気合を入れる方向間違ってるない？でもそこまでして勝ちたいんだな。球技大会で何があるのやら…。でもそこまで勝ちたくなっている気持ちは尊重してやりたい。

期限は二週間。前回と似たような感じ。ただ前回と違うのは、対戦相手のデータがしつかりと得られないという事。まあそこは学内大会だし仕方ない。とりあえず、みんなが言ってる6-D以外はそこまでじゃないんだらうと仮定しといて、全体の実力の底上げでなんと各試合に自分たちで対応できるように仕上げるしかないよな。

おれがそう考えている横でスバルはなにを考えているのか？またそれについては後から合わせたらいいとして、今日の練習だよな。

「あのさ…そういうのは普通に頼んでね。そういうのは脅迫しなく

ても」

「そうそう。そんなことしなくても、私たち二人はちゃんとみんなを強くするよ」

俺とスバルの視線が合わせる。思わず苦笑してしまう。

「あの！これは！脅迫じゃなくて…喜んでもらえるかなと……思っ
て…」

智花が突然強気の発言をした。した、けど……なんで尻すぼみに小さくなる？

「おお！智花！嫉妬か！ジェラシーなのか！」

「えーいや、あの違います！」

…え？智花そうなの？仮にそうでもさ、俺の事男って知ってるよね？まあ…なんでもいいよ。

「ほれほれ。それより、さっさと練習始めよ。じゃないと勝てる試合も落としちゃうぞ」

「でも！普通にやっても勝てないかもだろ。いや勝つんだけどさ…それでも少しでも勝ちに行きたいからさなんか秘策と欲しいんだよ！」

真帆が少し必死になってるのを見て少し揺らぐ。なんでそこまでして勝ちに拘るのか。悪いことじゃないんだけどさ。

「だってそのチームは男バスの連中が五人もいるんだ！こんな負けるわけにはいかねーんだ！」

そう言う事。付け加えて、紗季が去年同じチームと優勝争いをして負けてしまった事も教えてくれた。…そりゃ勝ちにいきたくなるっつてもんだ。

スバルの方も納得できたって顔になってる。

「つまりは再戦。しかも今度も絶対負けたくなくて、しかも優勝がしたいってことなんだ」

「そう！」

他の子達も似たような顔で、んで真剣な顔でこっちを見てくる。

こんな顔見るとホントに勝たせてやりたくなるよな…って、コレ

前にも言ったな。でも変わりはない。それに変わらないわ。

「それじゃあ、とりあえず秘策は置いてだ。今日はなにしようか？久しぶりだし…みんなやりたいことあるかな？」

「じゃあ試合！試合がしたい！」

「おゝ私も試合がしたい」

おお！スバルが上手く流した！しかも食いつかせた！

「じゃあお、じゃない。わたしが審判しようかな。スバルはみんなと一緒にゲームして。そしたら三対三ができるし」

ここはスバルに援護射撃しとこう。

「みさきちいいのか！」

「じゃあ私、長谷川さんと同じチームがいいです」

「愛莉ずるい！私も長谷川さんと同じチームがいいです！」

「おー。ひなもおにいちちゃんと一緒にいい〜」

「え！みんな。私も昴さんと同じチームで、でもそしたら昴さんと戦えないし…」

なんかまた、かおすな世界になってるけど…まあいいか。みんな楽しそうだしな。

「おゝい始めるぞ〜」

俺はボールと笛を取りに行くと、まだ言い合っているみんなを急かしてみた。

練習が終わってスバルと一緒に帰って今日の反省でもしようかなと思っていたが、スバルのやつちやつちやとみほしちゃんと帰ってしまった。二週間後までにどうするか？後、あの店の事も話したかったんだけどなあ……。

審判だけとはいえ、妙に重くなった体を引きずり、ようやく家に着いた…。服はそのままだし化粧もそのまま。さっさと着替えたい。風呂入ってさっぱりしたい。

そんな事を考えてたらなんかさらに体が重くなった気が……。早く

風呂の用意して寝よう、うん寝よう。

なんとか風呂を用意している時、携帯が鳴った。誰かと思えばスバルからだ。ああ…今日はいいや。

その日は風呂に入ってスッキリすると、即ベッドに倒れこんで寝てしまった。変な時間に寝てしまったせい、だから妙に早い時間に起きてしまった。んで、思い出した。そういえばメール。スバルからメール来てたなど。

ぼやけた頭でケータイを探り、スバルからのメールを見た。

【差出人：スバル

件名：今週末

ミホ姉がなんかノリ気になっててさ、合宿やるうって事になりそうなんだ。サキ週末大丈夫か？出来ればお前参加してほしいんだけど…。とりあえず連絡待ってる

はは…。流石みほしちゃん、面白い事をやってくれる。これは参加しないと損だな。

未だぼやけた頭だし、面倒だけど返事はしないと…。

【宛先：スバル

件名：RE今週末

おけ。とりあえずなんとかする。水・金行けなくなると思う。あとは何とかして
なんとかメールを送った俺は、そこで限界がきてまた潰れてしまった。

第二試合 第二ピリオド（後書き）

気付けばPVが1万件突破！ユニークも1800件を突破！

一か月で、しかもこれだけグダグダな更新で、それなのにこれだけの方に見てもらえるとは思わず嬉しいばかりです。これからも頑張っ
て行きますので、ゆる〜く見守りください。

第二試合 第三ピリオド

起きた。考えた。これは…無茶しないといけない。…何で今週末さ。

ぼやいていてもしょうがない。今週末の合宿に参加できるようになんとかしないと。ともかくさっさと着替えて店長の所に行かないと。今週無理させてもらって…って、まだ合宿の日程聞いて無いじゃん！くっそ、いやそれよりも休みを確保する方が先決か！
「さあ行くか！休みを勝ち取りに行くために！」

結果から言うときつちりと休みを勝ち取った…つもりだった。なんとかシフトを融通してもらって、金曜はスタートからラストまで日曜は最終シフトに入ってラストまでっていう約束で何とかしてもらえた。

が、後日来たスバルからのメールに俺は愕然とした。そこに書かれていた内容は、

『連絡遅くなつてごめん。合宿の日程なんだけど金・土・日の二泊三日でやるから。サキ頼むぞ』

……スバル遅よ。俺が必死に勝ち取った休み意味ねーじゃんか。くっそ…でも仕方ない。店長もこれ以上は譲歩してくれないだろうし…。まあ連絡だけしておくか。俺の参加は土曜の朝からだって。

ようやく終わった。ここしばらくはほとんどラストまでだった。マジでしんどい…。それよりも早く行かないと…。今、時間は？あ五時か。じゃあとりあえず着替えて…か。なゆさんのところに行つて暇もないよなあ。とにかく早く慧心に行つてあいつ等の飯作つてやらねーと。

俺はなゆさんに相談して、あらかじめ用意してもらった女性用の

ジャージを着こんで、それまでに叩き込まれたメイクをした。

「よっしゃ。ちょっとしんどいけど行くか」

家に戻って三十分で、今から慧心に向かえばちょうど六時くらい。何とか間に合うかな。確か朝食の時間は七時だったはずだし…。とりあえず事故は無いようにしよ。

時間通り慧心について守衛さんに挨拶して、スバルに聞いていた場所に向かって、よかったまだ起きてきてない。間に合った。冷蔵庫をチェックして材料確認して…。

よし！とりあえずみんなの好みがわかんないし和洋の両方を作ろう。うん。卵サンドとおにぎり作る。んで、スープはおにぎりにもサンドにも合うのにしないと…じゃあ味噌汁は無しだなあ。…野菜スープか。お、ミックスベジタブル。グリーンピース嫌いな子いるかな？まあいいかその辺はセルフにして、自分でやってもらう事にしよう。

さあ忙しくなるぞ！

「あ！みさきちだ！おっはよーってなんでいんの？」

「みさちゃんおはよ〜」

「牧村さんおはようございます」

「お、おはようございます牧村さん」

「未咲さん！お、お、おはようございます！」

「みんなおはよ。今日はねみんなのご飯作りに来たのよ。真帆ちゃん」

みんな朝から元気だわ。うん、いい顔してるわ。

「さあ、簡単なものだけど朝食できたからね。好きに食べてね。朝はちゃんと食べないと倒れちゃうからね。少しでもいいから食べてね。それと、みんなの好みが分らなかつたから、おにぎりサンドイツチ両方用意したの。スープは自分で入れてね」

私が：じゃない、俺が言うともみんなお腹が空いていたのか早速食べ始めてくれた。しかも美味しそうに食べてくれる。こんな顔で食べてくれるなんて嬉しいなあ。だけどなんでスバルがおらんのさ！

「ところでみんなスバルはいないの？」

「あ、昴さんなら朝のロードワークに行くって」

「おはよみんなって、サキ！来てくれたのか」

「おはよスバル。朝食できてるから食べてね。午前の練習と昼食の時間教えて。それに合わせて動くから。それと」

俺はスバルの隣にいる男の子に目をやる。

「おはよ。初めましてでいいかな？」

この男の子　竹中夏陽。名前は分かっている。けど、知っているのもおかしな話だしな。

「この間の試合で女子部にいた女の人でしょ？知ってるよ。竹中夏陽、初めまして」

「はい夏陽くん。私は牧村未咲です。今日から合宿に一緒に参加するからね。短い間だけどよろしくね」

「お、おう」

「じゃあ夏陽くんも、しっかり朝食を食べて午前の練習頑張ってね」

「ありがと」

「じゃあ、俺も飯食うかな」

……。

「えつと何かなサキ？」

「スバルは先にこっちに来てくれるかな？打ち合わせとかは、みんなのいないところの方がいいから」

「でも俺飯が…」

「ね」

うん。素直なスバルくんは私好きだよ。なあスバル　なんでちよつと怯えた顔をしてるのかな？ねえ教えてくれるよね？

さてさて、朝食を食べ終えたら自分の分だけ片付けておいて、と子供たちに言い残すと、何故か怯えた表情をしているスバルを連れて、子供たちには話の聞かれなれないと思われる所に連れて行った訳ですが…。

「なあスバル？」

「なんででしょうか？ママ！」

……。

「今なんて？」

「ハイ！ママ！」

「ちよつと待てい！なんでママよ！せめてサーだろ！」

「す、すみません！」

「って話はそつちじゃねっつもの！何で竹中いんの！？あと、竹中が入って来たときのあの空気はなに！重いよ！無駄に重すぎるよ！それに何でお前俺に怯えてんだ！」

捲くし立てるよう行っ？口撃 にスバルは固まってしまっている。

「スバル！聞いてんのか！」

と、胸倉を掴んで俺の顔がスバルによってしまったその時だ！

「ご、ご、ごめんなさい！」

カタンとなつた音の元を視線で辿ると、なんとそこには智花ツ！？

「あ、あのごめんなさい。今日の練習の事で昴さんに確認したい事があつて、ご飯食べながらみんなに話そうと思つて、で、ででも、あのお二人がそんな　ンツ！」

勘違いして慌てふためいている智花を、とりあえず拳によって活動を停止させる。全くなんて勘違いをしゃがるやら。

「なあ智花。お前俺が男つて事忘れすぎじゃないか？」

「ふえ…あ！そ、そうでした！」

なんでだろう、その言葉を聞いて凄く泣きたくなつた。そんなに今の俺は男に見えないのだろうか？つて、割と真面目に女装してきたから、簡単にはばれないと…つていうかバレたくないわ。俺つて

わからない為にここまで必死にやってるんだから……あれ？これって本末転倒なんじゃ？いやそれよりもだ！

「んで、智花は今日の練習メニューの確認に来たんだよね？」

「ふ、ふあい……」

まだ痛みが引いてないのか、涙目になって答えている。

「わかった。おいスバル」

「ッ痛！なにすんだよサキ！」

「ボケっとしてるお前が悪い！とりあえず俺との話の前に、智花に今日の練習メニュー教えてやって」

「ああわかったよ。それじゃあ智花、今日の午前のメニューだけど、スバルが智花に午前の練習メニューを伝えている間、俺はというと何で竹中がいるのか考えてみた。女子部……特に真帆辺りが一番毛嫌いしているはずの竹中が何でいる？竹中もわざわざ好きでもない女子部の合宿に何で参加しているのか？」

「やっぱりみほしちゃんだよなあ……」。

「いったいどんな経緯でこうなったのやら？一応確認しとかないと、いけない所で油注ぐような真似とかしたくないし。」

「ともかくあのアホからきかないと……。智花が行ったのを確認した俺はスバルから事の次第を吐かせた。」

「え、竹中が参加しているのは、目前に迫っている球技大会の参加球技はサッカーだが、本当はそっちじゃなくバスケットがしたいのでは？というみほしちゃんの予想により、無理矢理こちらに参加させられたと」

「スバルはコクコクと頷く。」

「しかし、見ての通り女子部との相性は最悪。それを何とか打破するため、今回の合宿を企画した」
力強く頷くスバル。

「そしてみほしちゃんが仕込んだ事には違いないが……後の始末はスバルに任せると」

ゆっくりと頷くスバル。

「それで色々試してみた…。テレビゲームにカードゲーム、そして夕食作りと。しかしその全てがことごとく失敗し、現在のあの雰囲気に至ると」

スバルは大きくうなずいた。おれはスバルにニコツと微笑みかけ、
「ガアツ！」

問答無用でボディブローをかましていた。もちろんひねり込みで。
「何で殴んだよ！」

「どう見てもお前が無駄に引っかけ回してるようにしか見えないからだ！」

「そういうならサキもなんか考えてくれよ！」

「無理だ！今の俺にそんな余裕があると思うなよ！」

「何ダメっぽいことをカツコよく言ってるのさ！」

「ふはは！開き直るのも一つの武器という事さ！」

「いやいや！ダメだろそれ！」

うぬぬ…。スバルのくせに！はあ…。てか、そう言うのってさ。

「しばらくほっとけば」

「おい、それじゃダメだろ？」

「いや、竹中も一応バスケを齧ってる人間だろ。だからさ、俺たちがちゃんと真面目に部活してるの見せたらいいんじゃないの？」

「なんでだよ？」

ここからは俺の勝手な想像だけださ。

「多分。竹中の奴不満なんだと思うんだよ」

「いや。それはもう分かってることだろ」

「違っつて。お前がさっき話してただろ、仲を良くするのは女子部じゃなくて真帆個人と。そうだろ？」

「あ、まあ…」

「てことは、竹中の中では女子部の事ある程度は認めてるはず。でも、あそこまで嫌悪する何かがあるなら、個人とのトラブルしかねーだろ。つまり、トラブルイコール不満って事になるだろ？スバル

お前なんか聞いてねーの？」

「ああ…確かに昨日ちよつと話したよ。なんだっけ…『すぐやめちまう』だったかな？」

おい。ちよつと待て…。

「スバル…てめーちゃんと理由聞いてんじゃねーか。なんで気付かないのさ？」

「仕方ないだろ。その後竹中の奴さつさと部屋に戻っちまったんだから」

「…まあ、それはどうしようもないことだけど。でも原因ははつきりとしてんじゃねーか。にしても、すぐやめるか…。俺から見たらバスケやってる真帆って結構本気だと思っただけだな」

「それは俺も同意。じゃないと紗季に専用のアイガード贈ったりしないって」

「マジッ！あれ特注品なの！？」

「ああマジ」

そこまでするんだっいたら本当に本気なハズだよ。さてどうするか…。このまま終わってしまうのはいくらなんでももったいなさすぎる。

「なあスバル…」

「なんだよ？」

「昼飯適当でもいいか？」

「急にどうしたんだよサキ？」

「いや、俺にちよつと真帆と竹中…あと紗季貸してくんね？」

スバルの奴。少し考えたふりしてたけど、あれは完全に投げたな。まあその方が俺にしたら、やりやすいからいいんだけど。

とりあえず、スバルに許可を得た俺はロードワークに行ったらしい竹中を探すと、体育館に連れて行き、ハーフコートでシュート練習をしていた紗季と真帆を呼び寄せ、

「じゃあ今からこのハーフコートを使って、三人で練習を始めます」
俺がそう宣言した途端、明らかに竹中と真帆が露骨に嫌な顔を見せた。とつても予想通りだったけど。ちなみに紗季は混乱中だ。こうなることが分かっててなんでこんな事をしているのかと。真帆は直ぐに文句を言うし、竹中もどっかに行こうとする。

「はあ。みほしちゃんとスバルには悪いけど、俺はそんなに優しくできないから。」

「もう…。真帆、少し黙りなさい。それに竹中君どこに行く…。いえ逃げようとしてるのかな?」

あくまで語気は荒げず…。でもちゃんと意志のある強い言葉で、二人の行動を静止させた。

「ふざけんなよ!なんで俺がこんな奴と一緒に練習しないと」
「私は今から三人で練習するって言ったのに分らないのかな?こっちに來て竹中君」

何か反論しようとしたが俺が途中で竹中の言葉を切り捨てた。切り捨てられた竹中はイラつきながらも、俺の言葉に渋々といった様子でこっちに來る。

「はい。じゃあ集まった所で三人での練習を始めたいと思います」
さて、これから練習を始める訳だけど…。とりあえず確認だね。これから始める練習でしないといけない事、それは真帆が本気でバスケをやっている事を竹中にちゃんと分らせる。

竹中自身が真帆を認めるところから始めないと、本当に何も始まらない。竹中に認めさせて、真帆にも竹中を認めさせる。お互いが理解できる場所まで持って行けば上等な訳だ。んで、それを実現させるためにはこんな練習とかどうだろうか?

「これから三人にはこの練習をしてもらいます」

俺は三人にそう言って、練習内容を説明する。今回する練習は目の前に一人置いてのシュート練習。左右四十五度からと正面の三か所からシュートする。

これを聞いた三人はなんだそれだけ?といった表情になる。が、

ここにもう一つの条件を加える。三人のシュートが連続して決まる事。つまり、九本連続でシュートを決めなければいけない訳だ。それと、シュートする順番と場所は自由でいいが、目の前に立つ人間は次にシュートを打つ者とした。この条件で連続シュートが一度でも決まれば、今日の練習は終りにするとも言っておいた。

それを聞いた三人はとても嬉しそうで、真帆なんかは「さっさと終わらせて、こんな奴とはおさらばだー！」なんて、竹中も「それはこっちの台詞だ！この馬鹿真帆！」なんて言ってる。

さてさて…一体どうなるやら。まあ直ぐに終わるはずはないと思うけどな。

意気揚揚と順番を決め始めた三人が、早く始めるとうるさくなってきたし、そろそろ行きますか。おれは、用意していたメモ帳とペンを持って三人の場所に向かった。

「じゃあ始めはどこからシュートするのかな？」

「それはあたしが得意なところからに決まってるんだろ！みさきち！」
そう言って真帆は右側へ移動する。真帆の正面に立つのは紗季。

どうやら、順番は真帆・紗季・夏陽らしいが…。どこまで続くかな？

「行くぞ！みさきち！」

「はい。いつでもどうぞ」

「うりゃ！」

俺は、真帆の後ろに立ち、メモ帳とペンを手に持って、真帆の結果を書き込む。結果は丸。ゴールした。

「どうだみさきち！」

「うん。とても綺麗なシュートだったよ」

「では、次は私です」

ゴールしたボールを拾ってきた夏陽が、紗季にボールを渡す。夏陽はちゃんと両手をあげ守備役の真似をしてくれる。さすが男バス。そういう細かいところもしっかりしてるんだな。

「えい！」

紗季が投げたボールは、そのままネットに吸い込まれるかと思わ

れたが少しシヨートだ。一度はリングに嫌われそうになったが、何とか押しとどまりネットを揺らした。これも丸。

多分、夏陽の気が気になったのかもな。

「入ってよかったね。少し守備の手が気になったかな？」

「えっと…そうですね、少し気になったかも」

「おい竹中！余計なことスナよ！」

「うるさい馬鹿真帆！男バスで練習してる時はあんな感じでやってんだよ！」

うん。やっぱりそうなんだな。あのカマキリさん、地味にいい仕事してるわ。

「真帆そんなこと言わない。実際の試合の時に手を挙げてない守備なんていないでしょ？こっちの方が実戦に近いからさっきのよりも練習になるよ」

「えーなんでみさきちは夏陽の肩持つんだよ！…でもそっちの方が良いてんなら！」

真帆が拾ってきたボールを今度は竹中に渡す。ってなんでそんなに強くパスすんだ。そんなに嫌いからお前は。

「どーだ夏陽！これなら気になってシュート打てないだろ！」

って、真帆何やってんだ…。邪魔して入らなかつたら終わらないんだけど…覚えてるのか？

そんな無駄な頑張りを無視するように夏陽はシュートし、鮮やかにゴールを決めた。これも丸。

「ツチ！夏陽のくせに！」

真帆がぶつくさ言って、夏陽は無視。ホント先行きが不安だ。

「じゃあ次どこからやる？」

「じゃあ、紗季が得意な左だな」

真帆がさつさと決め付け移動。そして今度は左からのシュートが始まる。なんか真帆がいらぬ事をしようとしていたり、紗季が夏陽を見習って両手を上げたりしていた。んで、結果は全員丸。

「じゃあ最後だね。これで全員決まればこの練習は終わりだからね」

俺は三人にこれが成功すれば最後だという事を意識させたくて、あえて力を込めて三人声をかける。その言葉に、三者三様の表情を見せてくれた。特に真帆なんかは、早く終わらせたいからなのか、やたらと力が入っているように見える。うん、この調子なら問題ない。

「決めたら終わりに近づくよ」

俺はそう言っただけで真帆にボールを渡す。逆境に強そうな真帆だがこの場はどうなるかな…。そんな俺の期待なんて露知らず、ボールを手にした真帆は、サツとシュートしてしまった。間違いなく早く終わらせようとして適当になっただけだ。ここは期待通りの展開だが、ボールは一度リングに嫌われはしたものの、後ろのボードに助けられなんとかゴールに収まってしまおう。うん。ちよつと残念。結果は丸。

次に紗季だが、こっちは真帆と違い少し硬くなっているように見える。真帆が応援しているけど…多分逆効果かな。ちゃんと決めるという意識が出たせいか、少し慎重になりすぎている。さっきまでとは全く違う紗季だ。

ようやく決心にて放ったシュートは、シュートしてしまいリングの手前に当たってしまった。結果はバツ。次の夏陽の所には斜線を引く。

「はい。じゃあもう一回最初からやりなおし」

俺は三人にそう宣告した。なるべくやさしい声を使って。ここで紗季を慰めたところで紗季の為にならないしね。ともかく俺の思い通り失敗してくれて助かった。このまま一発で成功させられたら俺の計画破綻してたし。

「じゃあ次はどこから誰がやる？」

さて…これで四十六回目の失敗。ここまで真帆が十五回・紗季が十八回・夏陽が十三回失敗している。こう見ると紗季の失敗が目立ってしまうな。まあ…紗季が悪いんじゃないんだけどな。

序盤でのミスも増えてきたし、三人とも大分疲れてきてるな…精神的にも肉体的にも。

「さあ次行くよ」

「みさきさん少し待って下さい」

「どうしたの紗季ちゃん？」

あれ？意外や意外、紗季が声を上げるなんてな。本当は真帆辺りが先に音を上げると思ったのになあ。

「あの、この練習…何か意、味があるん、で、すか？」

絶え絶えな息で何とか喋っている感じがちよつとアレだな…。それよりも、

「意味はありますよ。でも今は教えません。ん〜そうですね、ちょっと休憩も兼ねて、三人で考えてみましょうか」

休憩ときいて何かホツとしている感じがするが…。まあいい。

「私は水分を持ってきますから、体を冷やさないように汗はしっかりと処理するんですよ。それじゃあ私は行きますが、ちゃんと三人で答えを考えてみて下さいね」

俺は三人に念を押すと、体育館から寄宿舎の方に向かった。

休憩中のある一幕

「なんだよっ！みさきちは何考えてんだ!？」

「そんなの知るかよ！」

「ごめんね私が肝心な所でミスしてしまうから…」

「サキが悪いわけじゃねーよ！みさきちがこんなのやらせるからだ！」

「…：…なあお前ら。なんで牧村さんがこんな事させてんの考えないのか？」

「うちの事いじめて だけじゃねーのか？」

「真帆。さすがにそれはないと思うわ」

「…確かに」

「でもさ…。そんなのカンケーねー！あたしは諦めずにゼツテーや
りとげんだかな！」

「はは…馬鹿真帆もたまにはいいこと言うじゃねーか」
「なんだと夏陽！」

「なんでそこで喧嘩になるのよ！二人ともみんな一緒にやらないと
成功しないんだからね！少しは仲良くしたら！」

「……」
「……」

「なによ二人とも。急に黙りこんで」

「ねえねえ奥さん聞きました」

「聞きました聞きました」

「一番外している人がなにか言ってますよ」

「そうそう。一番外してる人が…どうしましょう？」

「二人とも！何でそんな時は息が合うの！」

「なんでって？」

「…なあ」

「もおー！」

「おいサキっ！」

俺は体育館を出た所でスバルに捕まった。

「わりい、あいつ等の水分取りに行きたいから歩きながらでもいい
か？」

俺はスバルの答えを待たずにそのまま寄宿舎の食堂を目指す。

「！お前待ってっ！」

俺の肩に手を置いて止めようとするけど、俺はその手を振り払う！
「サキッ！」

「なに！俺はあいつ等の水分取りに行きたいんだ！邪魔するな！」
振り払ったあいつの手は、いつの間にか体全体が目の前であって

先を進めないようにした。当然俺はそれを無視をする。だがスバルはそれを許してくれない。もちろん苛立ちを抑えられるはずなんてない。

「なんで邪魔するんだ！スバル！」

「それはこつちの台詞だ！お前のアレは何だ！お前はあの子達に何をさせたいんだ！」

「何をさせたいんだって？決まってるだろ、真帆と夏陽。あの二人をお互いに認めさせたいだよ！お前から見たら荒っぽいし、何やってるのか、無茶させて、意味無いように見えるかもしんねーけどな、それでも精神的にも肉体的にも追いこんでギリギリまでやって、そこまでいった時、んでそれをみんなでもやり遂げた時の達成感と喜びってあるだろ！」

「それはお前も知ってたんだろスバル！」

「ああ…それは知ってるよ！でもそれを小学生に求めるなんて無茶だろ！それで怪我してあの子達の将来をお前は潰す気がツ！サキツ！」

「潰さねーよ！誰が潰すか！そんな事してたまるか！あんないい子達誰が潰すかツ！」

「じゃあなんであのやり方にしたんだ！もつと違うやり方もあるだろ！」

「うるさい！お前は俺に任せたんだろ！じゃあ最後まで黙ってるよ！
それにあいつらなら出来るよ。大丈夫だ。信じてやって

くれよ、あいつ等を……俺を……」

「ツ！！………昼までだ。それ以上は許さねーぞ！サキ……」

それだけ言い残したスバルは、苛立ちを隠さず、他の子達が練習している所に戻って行った。

はあ…、馬鹿みたいだ。なんでこんなに熱くなってるんだろ。馬鹿かよ。ま、うん。

俺はとにかく体育館に残っているあの子達の為に急いだ。

昴の奴に任せっきりっというのがちよつと釈然としない。それに私はあの子達の顧問だし。そう思っただけで仕事抜けだし様子を見に来た訳だが…。何やら昴とその友達のミサキが口論している場面に出くわした。

昴が珍しく熱くなってるし、ミサキも普段では見せないような姿を見せてる。どうやら口論している内容は、真帆と夏陽の事らしい。なんかミサキがあの子達を無茶させてる事についてだけ…。何やらせるのか知らないけど。愛されてるな〜って思った。

多分これならあの子達に任せても大丈夫な気がした。

二人が行ったのを見送って、あたしはその場で一度伸びて、職員室に戻る事にした。

とある教師の証言より

「じゃあ続き…しよっか」

「はいッ！」って三人から元気な返事がきた。アレ？なんかあったのか？そう思わせるくらい元気のいい返事で驚いた。

三人は素早く位置に着くと「やりますよー」と言っただけで、さっさと始めてしまった。おれは慌ててノートを持つと結果を取っていく。

しかし、休み明けの一発目は直ぐに失敗してしまう。けど、三人はお互いの顔を見てニヤッと笑いあっている。なんで？と思ってる間にシユートを開く。正面から連続で成功する。次に右側から、それも難なくといった感じであっさりクリアしてしまう。

本当にこの三人に何が起きたんだ？俺が戸惑っている間に三人は最後の左側の位置につく。始めは紗季。緊張した様子だけど、体には変な力が入って無くていい脱力が出てくる。紗季が投げたボールはそのままネットに吸い込まれた。決まった瞬間紗季が喜び、二人とハイタッチをして喜びを分かち合う。次は夏陽だ。夏陽はボールをもらってとサツと投げた。でも、それが自分のリズムだったよ

うで、鮮やかにゴールの中心を射抜いた。夏陽はそんな嬉しそうには見えないが、二人とハイタッチをした時少し頬が緩んでいた。最後は真帆。ダムダムとボールが床に叩き、両手に収まると、

「やあああああー！」

気合の入った掛け声と共にボールをワンハンドで投げた！智花と同じように投げたかったんだと思うけど智花とは違う軌道を描いた。

でも、そのボールはボードに当たって、ネットの気持ちのいい音が体育館に響いた。

第二試合 第三ピリオド（後書き）

気付いたらかなり間が空いていてビックリ・・・
何か遅くなつてスンマセン。誤字・脱字などあればご連絡お願いします。

楽しく読んでいただけただけなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2681x/>

馬鹿二人と少女達

2011年12月5日00時54分発行